



* 0 0 0 3 9 3 2 0 0 0 *

0003932-000

3 1 0 . 4 - A 2 7 8 m

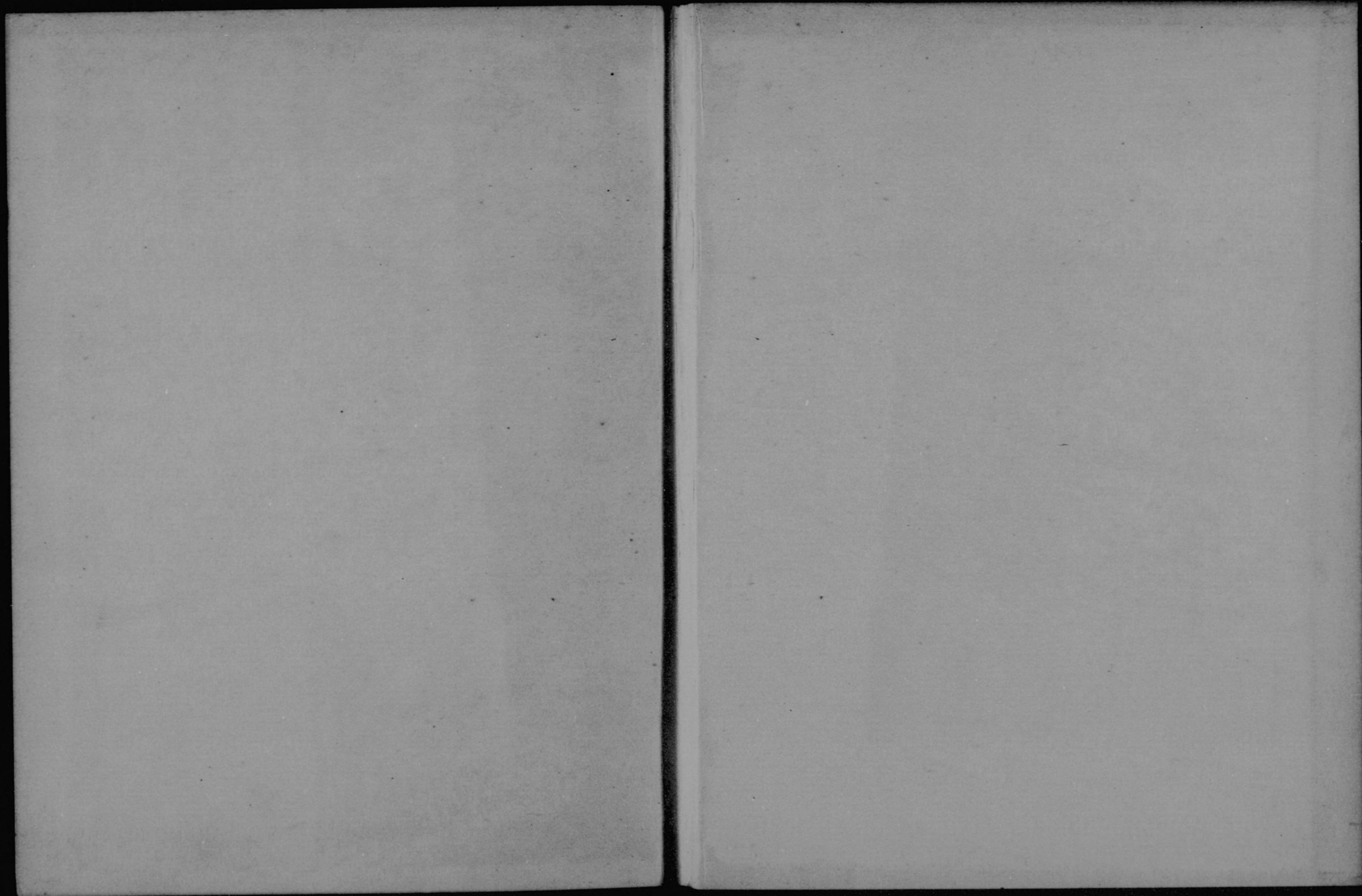
滿蒙封建論

赤神良讓・著

章華社

1 9 3 3

ABA



滿蒙封建論

赤神良讓著

章華社版

310.4
A278m



30426

序

「滿蒙封建論」——何たるアナクロニズムだ、と近代人は嘲笑するであらう。

嘲笑者よ！ お前には當分「嘲笑の自由」がある。だが、その嘲笑の波紋を、當分お前は、その頬に春かせてゐることだ。

少くとも一九三六年が来るまで。

そうしたら、その嘲笑の渦が、屹度「自嘲の波紋」へと「轉向の自由」を、お前に要求して来るに違ひなからうから。

嘗つて私は、「國際聯盟が出来た。さアこの世に天國の御降臨だ」といふ近代人の主張に反對した。

「今や白人世界に瀾漫してゐるものは、反日思想の暗流ではないか？ 日本の國際聯盟主義者が、今にしてその偏見の打破に努力しないならば、思はざるの日が来るであらう」と述べた。

そして私は、頑迷だと罵倒された。

だが、その時聯盟に讚美を浴せて、私を罵倒した二人の博士と二三の教授は、七年後、滿洲事變の勃發を契機として、猛烈なる聯盟罵倒論を公々然と繰返し、大衆に呼かけてゐられる。

そうだ、過つて改むるには遅いこと勿れである。

又、私は大震災前、「佛領印度支那買収論」を唱へた。先輩は「愚論をよせ」と私に忠告して呉れた。

然し又二年後、巴里の新聞紙「レクレール」は、其社説に於いて、私と殆ど同一の論據に立脚して、「印度支那賣却論」を繰返して論じなかつたか？

震災後、「大學都市論」が盛になつた。

でも、私はそれに反對して、「それは僧院教育の遺物であつて、時代錯誤も甚しい」と主張するや、「お前こそアナクロニズムではないか？」と非難された。

そこに國立の商科大学がある。

論者よ、時には思ひ出のために、國立の雜木林に、小鳥の歌を求める日曜日のあることを。
 「日本にも陪審裁判制を實施せよ」と主張された。
 私はそれにも時代錯誤を以つて反對した。
 だが、勿論私は嘲笑された。
 然し見よ！ その改築された、巨大なそして森閑としてゐる陪審裁判所と、その陪審員鐘詰の宿泊所とを。
 又、私は「金の社會問題」を論じて、金本位の没落と通貨膨脹の危機とを述べた。
 然し論者は、それを杞憂なりとした。だが三年後の現在はどうだ。
 けれども私は、今決してその先見を、誇示しようとする譯ではない。
 いや、私は恐怖する。一九三六年よ！ 平和であれ!! と祈る。
 たゞ私は事實を歪めて見たくない。
 新聞紙は語る。

世界經濟會議に於いて、支那代表宋子文は、「日本を世界の協力によつて、世界經濟網から日本の孤立を策せよ」と叫んで来たではないか？

又米國は、總數三十二隻の新艦建造計畫中に、スワンソン海軍長官の創意に基く、新型巡洋航空母艦二隻の建造を計上した。それにて新艦建造案の内譯中には、

- 驅逐艦 二十隻
- 潛水艇 四隻
- 航空母艦 (一萬三千五百噸) 二隻

がある、と報ぜられ、又最近中に太平洋橫斷戰術の中樞をなす、「第二アクロン號」を急造する、と報じて来たではないか？

日本よ！ 冷静であれ、然し見よ、そして實行に啓であるな！

昭和八年六月二十三日

大磯・清水山にて

著

者

滿蒙封建論 目次

1 世界・日本・滿洲國	五
一等國の没落	五
第三期の米國	一七
テクノクラシーの阿片性	二五
ラスト・ヘビーの日本	三四
米國の野望的東洋政策	三七
米國の陰謀遂に凱歌をあげる	四六
背面にある米國々策	五六
赤道直下の日本	六七
六十五對一の危機	七六

2 滿洲國封建論……………八七

滿蒙社會調查論……………八七

社會過程同一論……………一〇三

經濟的政治的過程の排斥性……………一二五

滿蒙社會の封建性……………一三八

第一回封建計劃……………一五九

國防移民と經濟移民の矛盾と其調和策……………一五二

1 世界・日本・滿洲國

一等國の没落

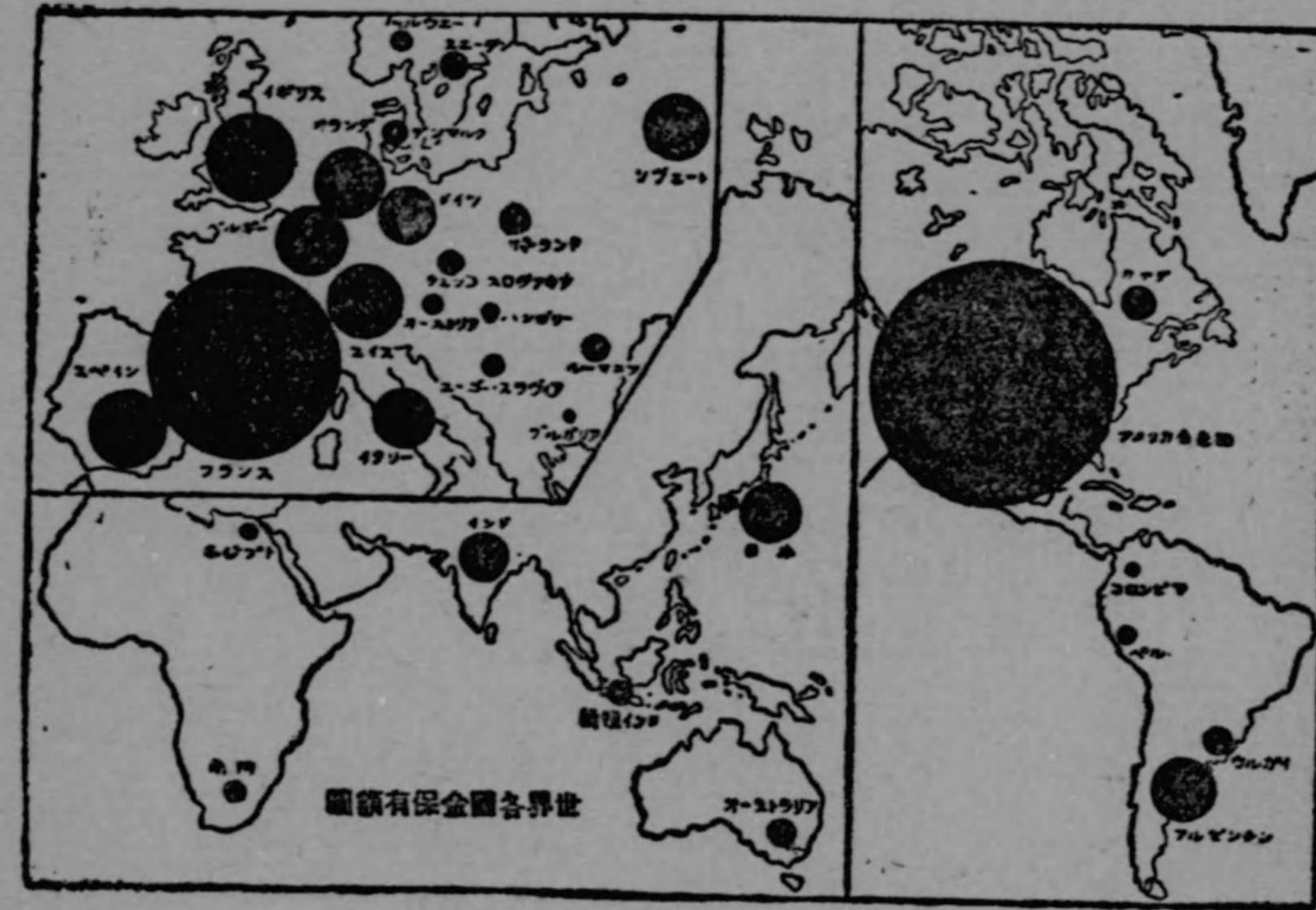
世界の強國は次第に没落して、その數を減じて行くものらしい。歐洲大戰後には、世界の一等國は、英・米・日・佛の四つになつて了つてゐた。そして又それから今日まで十五ヶ年を経過する間に、英國は著しく老衰して來た様である。ハンテングトン教授は、一國が衰亡するといふことは、畢竟するにその國が持つてゐる資源を、費消し盡して了ふからである、といふ。

さうかも知れない。確に英國をして世界の一等國たらしめたものは、何と云つてもその石炭坑と、カールリッターの所謂文明の時代が大西洋時代であつて、英國がその中心地位を占めてゐたことであつた。所が二十世紀となるや、殊に歐洲大戰後は、文明の時代が大西洋時代より太平洋時代へと變遷し、従つて英國はその文明の中心地位より漸く離れかけて來たと同時に、又その石炭坑は堀るにつれて次第に貧坑となり、その採掘にもより多くの費用を必要とする様になつた。そればかりではない。格安のアメリカ炭と電力及び石油との急激なる進出と、機關の進歩發達による石炭消費量の節約とによつて、英國炭は内外より壓倒され、ここに英國産業の主動脈は、遂に硬化せしめられねばならなくなつた譯であつた。そしてこの産業の動脈硬化につれて、失業者の數は激増し、失業者の數の激増は、一方失業保険料の拂込額を激減し、他方その保険の支拂額を急増せしめて、遂に國家はその負擔に堪へ兼ねて來たのであつた。斯くして

失業問題の解決をばその使命として出現した、第二次勞働内閣は改造されて、マクドナルドを首班とせる舉國一致内閣となり、この失業保険制度を破棄して、國家をその破産から喰止めようと努力したのであつた。けれども英國は世界の驚倒の中に、世界金産額の約半ばを生産するトランスヴァールを占有しながらも、その金本位制の離脱を餘儀なくせしめられ、現在のその如く、英國の國勢は陵夷として衰退するに至つたのであつた。

では佛蘭西はどうだ。佛國は今世界の金の三割弱を所有してゐる、といふ者もある。然し佛蘭西では生れる人口よりも死亡する人口が多いではないか？ 二十世紀に入つてからは、一ヶ年平均二萬二三千の人口減衰を示してゐる。そしてそれは明に遠からず、その社會が衰退する何よりの證據である、と社會學者は等しく云ふ。

而もその金は、たゞ昨日まで世界各國が英吉利に預けてゐた金を、英國の財界が不安になり、金の輸出を禁止したので、己むを得ず比較



主要各國金保有高

一九三三年一月(單位百萬弗)

アメリカ	四・五六六
フランス	三・二三二
イギリス	五八六
スイス	五〇九
スペイン	四三五
オランダ	四一六
ベルギー	三五九
イタリア	三〇五
日本	二二二
ドイツ	一九一
世界四十五ヶ國計	一一・一四〇

的財界の安定してゐると見られてゐる佛蘭西に預入れてゐると云ふまでとあつて、その多くは他國の金ではないか？ たゞ佛蘭西人は非常の節約家であつて、一番貯金をしてゐる縣が、一番子供を生まない縣であるといふ様に、子供を生むことを節約してまでも貯金をし、それで有利な各國の公債を買込む、だから各國から年々巨額の利子が佛蘭西に流入するし、又當分は獨逸からの賠償金も入るので、どうにかやつてゐるに過ぎない。

それ故に最眞目に見ても、どれだけ將來を囑目することが出来るか？ 疑問である、と私は思ふ。それに米國に支拂はねばならぬ戦債もあるし、何と云つても年々國全體の人口が減少して行くのでは、「まご／＼してゐると、セーヌ河畔に日本人の植民地が出来るぞ！」と悲鳴をあげる佛蘭西の人口學者でなく、とも、その影の薄さを淋しく眺めねばなるまい。

殊に佛蘭西は、舊時の三國同盟國伊・獨・埃のプロックと、再び對立せ

ねばならなくなつた。そしてそれは曩には獨逸の關稅協定運動となり、近くはヒットラー・ムソリニの握手となつて現れて來た。

先づ獨逸に於いては、外相であつたストレーゼマンが、足腰の立たぬまでに打のめして置いて、いや、手をもぎ足を切取つて置いて、おい兄弟、これから仲をよくしようぜ！ とは、どうしても我慢は出來ねえ」と公言し、戰後新なる一マルクの銀貨を鑄造せしめて來た。そして銀貨の裏面には、獨逸民族の發祥の地を表象する森林の圖を浮彫にし、その中央には一本の大樹が、三本の枯枝を三方に伸してゐるのである。

勿論、東にのびてゐるのは失はれたチエツコの枯枝であり、北にのばされてゐるのはポーランドであり、西にのばされたのは、彼のアルサス・ローレンの枯枝である。何時の日かその枯枝が獨逸民族の血によつて、簇々たる若芽を吹き返すことであらう？ 思ふてその銀貨を握り締める時に、民族の血にほてる手は、その銀貨のひやゝかな

るに震えずにはゐまい。「糞！ 今に見ろ！ おゝ祖國獨逸！」と心に叫ばれずにはゐない。

見よ！その農夫の犁のめりく／＼と力強く大地にめり込む様を！その職工のハンマーに散る紫色の火花を！一枚の銀貨、斯くしてそれは洵に悲愴なる民族詩であり、又それは佛蘭西にとつて悲劇の種子ではないか？ 私は、一昨々年五月三日、五十二歳でなくなつた、彼ストレーゼマンの遂げおゝせ得なかつた心事を思ふと、暗然たらねばならない。

然しそこにナチスの騎士ヒットラーが飛出して來た。そしてヒットラー・ハーベン内閣は、その在任期間たる向ふ四ヶ年間、即ち一九三七年三月三十一日まで、國會に對して絶對的獨裁權を要求し、たとひ憲法に牴觸するも、凡ゆる法律を公布し得る權限を、四百四十一票對九十四票で可決し、ナチスの獨裁權を確立した。而もヒットラーは、「賠償の重荷から祖國を解放せよ」と叫び、「ヴェルサイユ講和條約は

改訂せざるべからず、そして吾等に軍備の平等權を附與せよ」と主張する。

又吾々は、ムソリニによつて常に捲起されてゐる、南歐の暗雲を見なければならぬ。曩に倫敦軍縮會議に於いて、伊佛の妥協案が不成立に終り、後漸く型ばかりの妥協案が辛うじて成立し得たのも、最近また英吉利首相マクドナルドが、飛行機にてローマへ飛び、ムソリニと會見して四國協定案を議したのも、皆實に南歐に低迷する伊佛の反情によるものに外ならない。そしてその最大原因は、確にアルゼリア問題である、といふことが出来る。

アルゼリアはアフリカの北部、地中海岸にあつて、伊太利半島の南部及びシ、リー島と相對立してゐる。而も歴史を溯るならば、それはカルタゴ戰爭以來、伊太利民族の勢力範圍であつた。然るに現在では佛蘭西植民地中唯一の寶庫として輝いてゐる。佛蘭西は廣大なる植民地を今日猶領有してゐる、例へばアフリカのサハラ砂漠を

はじめとして、マダカスカル、印度支那及びメソポタミア一帯の委任統治領がそれである。然しこのアルゼリアに及び得るものは他にあり得ない、アルゼリアの經濟的價値は實に佛蘭西の興亡に關係してゐる。だからそれだけ又伊太利に對しても、それは重大なる意義を以つてゐる筈である。

それ故にムソリニが「大羅馬の昔に歸れ」と絶叫してゐるのは、單にその政治的形式に於いて、羅馬時代の廣場の政治に歸れといふことを意味するのみではなく、その大羅馬時代の憧憬を、對岸のアルゼリアに投げかけてゐる。見よ！ 狙ふが如き彼の眼光を！ 又ムソリニは云ふ、吾が伊太利が世界の一大強國としての面目を維持し、且つ將來の雄飛を期する爲には、尠くとも一億の人口を有するところが必要である。然り一國の人口の減衰は、畢竟その國勢の衰退を暗示するものであり、臆ては死滅に赴くものであることを豫告するものである。洵にヘーゲルが、「父に非ざる者は人に非ず」と云へる

が如く、一國に對して最も不忠なる者は、脱税者に非ず、兵役忌避者に非ずして、産兒制限者なり」と。そして彼は「數は力なり」と信じ、「生めよ！繁殖せよ！そして吾が伊太利よ！祖國大羅馬の光榮に歸れ！」と宣傳し、一九二六年十二月十九日の勅令によつて、二十五歳以上六十五歳以下の男子にして獨身なるものには、獨身税を賦課し、それによつて年五千萬利の財源を捻出して、それを「母體及び幼兒保護局」に與へたのであつた。

では伊太利は、人口過少の國であるか？否、寧ろ移民國として有名であることによつても知ることが出来る如く、土地の瘠薄に比して人口の稠密なる國であり、今日までその人口問題の苦悶に悩んでゐた國ではなかつたか？ぢや、彼ムツソリニの眞意が那邊にあるかを推知することは容易である。それは實に肉彈の大量生産に外ならない、そしてそれによつて彼は、昔日の如く地中海を、伊太利の内海にせんとする國民的野望をば、煽動するのである。

又伊太利はアドリアチックを挟んで、フィウメ問題でユーゴ・スラビヤと係争關係にある。そこで驚愕した佛蘭西は、その傳統的外交政策によつて、伊獨、埃三國の背後にある、ユーゴ・スラビヤ、ルーマニア、チエツコスロバキア、ポーランドと結び、盛に軍事費を貸附けて、その軍備を擴張せしめてゐる。

然るに勞農ロシアの第一假想敵國は、明にポーランドであり、次いでルーマニアである。それ故にロシアは先づポーランドの隣接地であるウクライナの西部國境にその軍備を集中してゐる。そして吾々は、歐洲大戰後世界第一の陸軍國は佛蘭西であると考へてゐたのに、いつの間にかロシアは五十六萬の常備軍と、戦時に於ける百四十五萬の兵員を以つて、佛蘭西の地位をば壓倒して了つたのである。而も吾々はここに彼の産業黨事件を思ひ合せることが出来る。即ちラムジン一派のソヴェット政府顛覆の陰謀がそれである。英佛政府當局、石油業者及び商業會議所が軍資金を調達して、先づルー

マニアをしてロシヤと戦端を開かしめ、ポーランド、ラトビア及びエストニアの如き、バルチック海沿岸諸國をして、十萬のウランゲル軍と共に、合せて八十萬の大軍を以つてロシヤに侵入し、モスコー及びレーニングラードを陥れ、ソヴィエト政府を顛覆せんとするが如き事件——よしそれは捏造であつたとしても——その事件は却つて、ソヴィエト政府に利用されて、よりその赤衛軍の増大をば來さしめたのであつた。

それ故に佛蘭西は、伊、獨、埃を牽制せんが爲に、ロシヤを敵とし、それ等小國の意を迎えんが爲に、國際聯盟に於いて、當然支持すべき日本をば袖にせざるを得なかつた。だが最早英、米は頼るに足らないのみならず、歐州大戦當時、その軍艦を地中海にまで進めた、雄邦日本の反感の意外に高潮され來りたるに、多大の不安を感ぜねばならない。そこで、佛國政界の大立者前首相タルデイユ及びマラン等は、日佛親善同盟を組織し、進んで日佛同盟は實現可能なり、と説き、そして滿洲



— やりな和平は洲歐 —

國の開發にも盡力する肚なり、と云ふ。よしそれは一片の外交辭禮なりとするも、累卵小國等の上に座す佛蘭西の不安は、全く蔽ふ可くもない。

第三期の米國

ぢや米國はどうだ、盛んぢやないか？ と羨望する者があつた。然し私は左程にも思ひはしなかつた。何故かつて？ 成程、米國は殆ど無盡藏に近い資源を擅有してゐる。そして歐州大戦當時歐洲の各國が戦

争に夢中になつて、生産どころではなかつたので、生活物資の大半をば米國に仰いで來た。そこで米國はその生産の規模を急速に増大して、全歐洲民の餓餓の急に應じたのであつた。けれども平和になつて、歐洲の産業が再び平素の有様に歸つて來ると、世界の生産額はざつと二倍になつた譯で、米國品は賣れず、米國はその生産の過剰に苦しまねばならなくなり、生産を制限して、失業者の巨群を生むに至つた。

そして戦後の米國は、年々歐洲から支拂はれて來る戦債とその利子とで生活してゐるといふ有様であつた。でもその金も悉くは消費し盡されないうし、英佛も獨逸が自國に賠償金を支拂はなければ、米國の戦債を支拂はないので、米國はどうか取れる英佛から戦債を取つては、次回の戦債を取る爲に、獨逸にそれをば貸附けて行つた。斯うやつて、その金は獨逸から英佛の懐を素通りして、米國に歸り、それが再び獨逸に貸附けられる、といふ三角關係を循環する中に、どう

にか取れさうであつた帳面は、どうにも取れさうでない帳面にと變つて了つてゐた。だが兎に角利札を切つて、生活するといふ點に於いては變りはなかつた。

そして利札で生活することになると、それは恰も、他人から輸血して貰つて生きてゐる様なもので、自らは生産する必要がなくなる。のみならず諸外國が、米國に向つて巨額の元利を支拂ふ必要上、その關稅の障壁を高め、又その支拂ふ元利が巨億になり行くにつれて、弗は漸次に高くなり、二者相率ゐて益々その輸出を閉塞し、更に又その生産をば制限する必要に迫られて來たのであつた。故に米國は、他人からの輸血によつて肥満し續けて行く人の様なもので、その消化器は最早不必要となりかけて來た。そして若しその胃腑や腸が少しでも活動して、無用の血液を造るならば、著しく血壓が上昇し、腦溢血を起す危険に既に充分襲はれてゐた。それは米國が、國際的經濟關係に於いて、利札時代といふ資本主義の第三期に入つて來た惱

みである。巨大なる、洵に未曾有なる生産力を持つてゐて、却つてその爲に苦しみ、その爲に失業者を出してゐたのであつた。

それのみではない。斯く國內關係に於いて物價の下落となり、國外關係に於いて外國貨幣價の慘落となるか、弗は日に／＼暴騰し、物價の急激なる暴騰を見る日本に於いて、「金から物へ」と叫ばれてゐると正反對に、米國に於いては、「物から金へ」と叫ばれ、斯くして握られたる金は、或は預金され、或はその金利の低落と銀行の信用凋落とによつて死藏され、又は買はれて海外に流出して、貨幣はその流通圏内から急速に逃避し出して來たのであつた。然るにこの通貨の逼迫は、又更にその物價安に拍車をかけ、物價安は失業者を簇出せしめ、現在世界の失業者三千萬人の三分一強、即ち一千二百五十萬の失業者をば出し、その勞銀若くは俸給は平均五割六分五厘の減率を示して、通貨をたゞ社會の上層、ブルジョア階級に偏在せしめて來た。加之、ブーヴァーの景氣政策は、ヨーロッパ諸國の對米購買力を増進せんが

爲に、餘りに巨億の金を貸出し、それによつて米國自體に金融難を感じ出さしたのみならず、その貸金の回収に關して多大の不安が感ぜられて來たのであつた。而も彼等に最も借り來りたる獨逸は、遂に悲鳴を上げて、「今は破産の外なし」といふ。然るに獨逸の破産は、勢い米國の破産を誘致せずにはゐなくなつて了つた。そこで驚いた米國は英佛に云つた、「獨逸の賠償金を待つてやれ、獨逸は破産するぢやないか」と。然し英佛は云つた、「では又こちらの戦債支拂も猶豫に預りたい」と。斯くしてそれは戦債モラトリアムとなつた。

そしてこの戦債取立の困難は、國家の財政に大なる赤字となつて現れて來た。昨年十一月三十日の國債總額は二百八億六百萬弗であつたから、一九二九年のそれに比較するならば、三十八億七千五百萬弗の増加であり、又一九三三年會計年度の過去七ヶ月間に於いて、既に十二億七千七十二萬弗の赤字が出されてゐるのであつた。又民間に於ける負債額は、實に千二百三十億弗と算せられ、その中會

社負債は四百四十億弗、不動産階級の擔保負債が五百七十億弗、農村負債が二百二十億弗であり、而も一九三三年の生活費を一九二九年のそれに對比するならば、二割二分の減少となつてゐるから、三年前の一弗の負債は一弗三十三仙に當り、又當時から今日までを通じて動かない、利子の六分は八分に當る譯となつたのである。いや、それのみではない、農作物殊に小麥市價の低落は、この三年間に二分の一となつて來たから、一九二九年に農夫のなした一弗の負債は、三年後の今日、彼等にとつては二弗六十六仙の負債に相當するものとなり、負債の返済は愈益々困難となり、一九三一年、埃獨に始まり、英國及び日本その他の主要資本主義國及び多數の二流資本主義國を襲ひ、その金本位制を崩壊せしめたる恐慌の煽りは、次第に潜行深化して、米國の地方獨立の小銀行に迫り、一九三〇年以來年々破綻せしめたる銀行数は、千三四百乃至二千二百と算せられ、一九三二年二月には復興金融會社が創設されて、その金融を一時彌縫したのであつた。然

しこの深化されたる大恐慌には、結局抗すべくもなかつた。そして今年二月ヘンリー・フォードが、ミシガン州の取引銀行より七百餘萬弗の預金を引出したのを、きっかけに、ミシガン州一齊に銀行の休業

年次	休業銀行數	預金合計(百萬弗)
一九二七	六六二	一九四
一九二八	四九一	一三九
一九二九	六四二	二三五
一九三〇	一、三四五	八六五
一九三一	二、二九八	一、六九二
一九三二	一、四〇〇	七〇〇

となり、急激の勢を以つて各州に及び、遂には世界の金融王座である紐育ウォール街の銀行を壓倒し、三月に入るや、全面的なる銀行恐慌となつて來た。

三月五日新大統領ルーズヴェルトは、大統領布告を出して、六日より九日まで全國銀行の休業を斷行し、右期間中は一切の金銀貨、金銀塊又は通貨を拂出し、輸出し、イヤーマーケット、或は引出し又は委譲す

ること、若しくはその死藏を容易ならしむるが如き、他の一切の行動をとることを禁じ、手形交換所證券の發行を許可したのであつた。



—義主本資のトンセーパ百—

命じ、二週間に約四億弗以上の金を還流せしめ、更にその期限を二十七日まで延期したのであつた。

又聯邦準備銀行はルーズヴェルトの「通貨の死藏は國家を害す」といふ布告によつて、銀行休日前に金を引出し、三月十七日まで再びそれを預金しない者の氏名を報告する様、各加盟銀行に

然しこの金輸出禁止は、はじめたモラトリアムの意義に於いて行はれたに過ぎなかつた。けれどもルーズヴェルトは、三月十九日、突如政治的意義に於いて、即ち來るべき倫敦世界經濟會議を自國に有利に導くが爲めに、經濟的には維持し得る金本位制をば自發的に放棄し、金輸出禁止の持續を斷行することに決定した。又民主黨議員トーマスは、二十日通貨政策に於ける信用の擴張と、五割まで弗の平價を切下げ得る權限と、銀の金に對する比率及びその比率に依る銀貨の鑄造權とを、三大眼目とする通貨統制獨裁權を大統領に附與する、所謂インフレーション案を議會に提出し、以つて國際的金本位制の協定に備へたのであつた。でも世界の金の大半が米國に偏在してゐる悲しさに、まだその危機は去つてはゐない否、これからである。そこに吾々はまさしくと金持の悲慘を見なければならぬ。

テクノクラシーの阿片性

肥大し切つてゐる男は、動脈硬化して腦溢血で倒れる、然し多くは一撃でやられない、その最初の徴候は、肩がはつたり、又はよろめいたりする。そして今次の米國の恐慌は、たゞその徴候に過ぎない、今徴候があり、軽い腦溢血でやられると、彼は急に瘠せたいと思ふに違ひない。だが若しその爲に急激に猛烈なる運動を開始するか？ 彼は其心臟に痙攣を起さねばならない。實際、私が見る所では米國は、この腦溢血と心臟痙攣の兩天秤にかかつてゐる。現在の米國が急に瘠せる爲には、二つの方法がある。その第一の方法は、猛烈なる運動即ち戦争をやることである。でもそれには敗戦といふ心臟破裂の危険がある、嘗つて米國は、日米問題の險惡となつた時に、全米國海軍を太平洋に集めて大演習をやり、終つて舳艫相衝んで吾が横濱港外にやつて來て、その大艦隊を羅列して見せて呉れたことがある。そして吾が日本國民は、その大艦隊、即ち第二回目、黒船の禮砲を聞く前日、長くも浮華輕佻を戒め給ひ、質實剛健勤儉貯蓄の訓を垂れさ

せられたる、成申詔書を拜し奉つたのであつた。考へるに昨年から米國は何故かその全艦隊をば再び太平洋に集中し、續け様なる三回の大演習を行つたが、然し未だ一回もその大艦隊を東京灣頭に並べて、その英風を見せようとはしない。そうだ、多分に米國はその胸に不安の高鳴りを覺えるからであらう。

次に第二の方法は、下劑をかけることであらう。そしてそれは明に歐洲の戦債を棒引にして下ふことである。だが下劑の苦痛には一寸堪へられまい。そこで現在の米國は、非常なる焦慮を以つて、適當なる絶對健康法を求めてやまない。出來得るなら、過剰せる物資を四億の人口を有してゐる支那に捌いて行きたいと考へるが、支那は御覽の通りであり、近くには地の利を占めてゐるのみならず、貨銀安爲替安の競争者日本がある。而も世界の各國は、米國品に對してその關稅率を急速に高めて來てゐるし、關稅休日案も容易に纏りそらもない、して見ると今の所矢張り米國は八方塞りであり、この八方

塞りの打開策として、世界經濟會議が提案されて來たのであつた。

一體、難病業病程多くそれに對する靈藥があつたり、妙藥があつたりするものである。だから米國のこの過剰生産失業病に對しても、靈妙藥が飛出さない筈はない。そしてこの靈妙藥こそ一時流行し出したテクノクラシーであり、その藥屋こそ、新社會經濟學説の提唱者であり、宣傳係であるハワード・スコットである。而もこの賣藥の効能は、又よく現在米國の悩みを語るに妙を得てゐると私は思ふ。

先づテクノクラットは、米國に於いて實現されてゐるが如き機械力の偉大さを高調する。現代の機械生産は、往時の手工業生産に比して、實にその能率を八百七十倍してゐるのに、米國の社會機構が生産活動に使用してゐるエネルギーは、實に三百五十三倍して來てゐる。そして一八〇〇年時代には、一日一人當り千六百瓩カロリを使用してゐたに過ぎないのに、今日では十五萬瓩カロリを消費してゐる、驚く可きではないか？ と自ら驚愕してゐる。成程それは

偉大なる進歩である。然し待てよ！ この偉大なる進歩が却つて今日の米國の苦痛となつてゐるではないか？ ここに深刻なる彼等の懷疑が発生せざるを得なかつた。

嘗つてトインビーが「英國産業革命史」の中に、蒸氣機關の發明によつて工場が発生し、それによつて職を失ひ、産を傾けた幾多悲惨なる中産階級の人々の流浪する様を叙して、若しこの慘狀を彼の蒸氣機關を發明したるワットが目撃したらんには、必ずや彼は、その蒸氣機關の發明を斷念したであらう、と書いてゐる。その通りであるとも考へる。だから蒸氣機關は又プロレタリアの大量生産をなすにも役立つた機關であつた。然るに蒸氣機關よりも更に幾百倍か能率的なる電動機の發明は、人間の勞働力を更に一層節約することによつて、永遠なる失業を製造するに役立つ、プロレタリアの多くをルンペンに没落せしめずにはゐない。洵にシスモンデーが既に喝破してゐたが様に、機械は失業者を造る。では人間が機關を發明した

目的は、失業者を造り、人間からパンを掠奪する爲であつたか？ 否、
 断じてさうではなかつた。反對に人間により多くのパンを與へん
 が爲に外ならなかつた。丁度それは社會から泥棒を無くする爲に
 設置されたる監獄が、犯罪學者ロンプロゾーの云ふが如く、益々立派
 な泥棒を教育する「官立泥棒大學」となつたと等しく、最初に目的とし
 たものをその結果に於いて裏切つて來たのであつた。私はそれを
 ば「目的結果相反の原理」と呼ぶのである。

今、考へるに、人間はその生産の手段として、道具を發明し、次いで機
 械を造り、機關に進んで來た。そして道具は全く他動的であるから、
 それ自身では動かない、故に道具生産の時代には人間が主人公であ
 つて、道具が人間の奴隷であつた。然し機械となると半自動的であ
 あるから、機械生産の時代に這込むと、人間と機械とは協同者となり、
 友人關係に立つて來る。然るに機關生産の時代になると、機關は全
 く自動的であるから、機關に強制され、機關に監督されて人間は働く、

故に自由であつた人間が轉落して、機關が主人公となり、反對に人間
 が奴隷となつて了ふ。けれども人間の不幸はたゞそのみに止
 まらない、さては機關によつてそのパンが強奪される。こうなると
 人間は、もう我慢は出來ない、「何處の馬鹿野郎が、この電動機といふ殺
 人機を發明しやがつたのか？」と叫び出す。クロボトキンが、人間は
 現代程未だ曾つて富裕であつた時代はなかつた、一塊の土、一片の石
 と雖も、悉く人間の汗と膏とによつて資本化されて來た、だのに今日、
 どうして食へない者があるのか、貧乏人が？ と疑惑したと同様に、
 テクノクラットは、この米國産業關係の矛盾に着眼して來たのであ
 つた。

そこで、ではこの矛盾は如何にして發生しの來たか？ 彼等テク
 ノクラットは、それを次の様に考へた。先づそれは金で物價を評價
 するからである、と貨幣罪惡説を考へ合せて、價格制度の排撃をやる
 のである。そしてそれは遠くトーマス・アッドウツドの貨幣貧困説

及びロバート・オーウエンの労働時間紙幣の發行に暗示され、近くは歐洲大戰と戦後の革命とによつて、ロシアの紙幣價值は遂に戦前の五百億分の一となり、獨逸のそれは一兆分の一となつたが如き、慘たる「紙」への大暴落と、社會主義の貨幣罪惡利子否認論、アービン・グライシャーの「物價指數紙幣説」及び「貨幣錯覺論」並に勞農ロシアの銀行法等の暗示によるものであらうが、今日までの金による價格制度を廢止して、エネルギーによる計量によつて、社會機構の機械的活動によつて起る諸現象を測量し、完全なる消費を促進する爲に、エネルギーによるエルグ紙幣又はカロリー紙幣を發行することを主張することとなる。

次に彼等は、その經營の管理又は統制を力説し、それは「科學の統制」であるから、科學者即ち技術者によつてなさねばならないと云ふ。生産の三大要件であつた、労働資本・經營が、家内工業時代にあつては、

一人の家長に屬し、工場工業時代の初期に於いては、資本と經營とは資本家に労働は労働者へと分屬して行つた。然し次いで金融資本家の發生するや、資本に對する法律上の利子請求權は資本家に、統制・管理・經營は技師又は支配人等のサラリマンに、労働は労働者にと三權分立の姿をとつて來た。ここにサラリマンは資本家と労働者との間に介在して、經濟的に重要な地位を占むるものとして、認識され出して來たといふ事實と、ギルド社會主義の思想とを反映して、嘗つてサン・シモンが、その「産業者論」に於いてなしたが如く、無能なる今日の政治家より、その統制權の引渡を要求してゐるのである。

そして若しその統制權が引渡されるか？ テクノクラットは、勞力的適齡期にある二十五歳より四十五歳までの人々は、一日四時間、一週二日間の労働にて、一ヶ年に二萬弗に相當する富の分配を保障するといふのである。不況時代の現今、一ヶ年一人平均百四十四弗の生活費に比して、何とそれは素敵ではないか？ 正にパラダイス

の御降臨だ！。然し私はそれに對して幾多の批判を持つ、でもその餘白をここに持たない。たゞ私は昔アテネの喜劇作家達は、屢々そこで働く必要のない豊饒の國を描き出したものである、と云ふよとをこゝに附加して、その批判を他の機會に譲る。けれども米國が、この素敵な極樂説に夢中になり、其阿片性を求めねばならぬだけ、それだけ不安であり、悲境にあつたことだけはこのテクノクラシーをして裏書せしむることが出来る。そうだ、その通りである。テクノクラシーの流行に次いで起つたものは、銀行破綻の流行である。

ラスト・ヘビーの日本

却説、最後の一等國、吾が日本を見よう。確に日本はその國際經濟に於いて、未だその初期たる物々交換の時代にある。そしてそれだけ却つて世界的恐慌の波に對して、安定性をもち得るのである。現在日本には海に捨たい程の食糧がある、そして生絲が餘る。だから

それで不足してゐる鐵及び綿と交換するのである。成程、日本には金塊が少くなつた。一九三〇年の一月に比して、一九三三年の一月の金保有高は半減してゐる。だが外國から物資を買つて、それを消費して了つたので、その金が外國に取られたのではない。よし米國にあつても、それは矢張り日本の所有であることに變りはない。そればかりではない、日本の移民が一ヶ年間に内地に送る金は二億、日本の圓價の悪い今日では五億に近い、それが國際貸借の爲替面では、日本の輸出額を食つて、輸入された物資の如く現れてゐるのではないか？。私は多くは言はない、日本も非常時だ、然し老衰病の隱居英國、寡婦で吝嗇の佛國、肥大病で動脈硬化してゐる米國等とは違ふ。日本はこれから働き盛りの膏の乗り切つた労働者であり、又これからもあらねばならない。

私は、斷じて樂觀しないが、明治時代の八大強國のピリから、昭和の今日一等國のトップに向つて、ラスト・ヘビーをかけてゐる、雄々しい

各國の金保有高

月 末	アメリカ	フランス	イギリス	スイス	オランダ	ベルギー	日 本
1930年 1月	4,291	1,683	731	108	177	164	520
1931年 1月	4,643	2,176	679	126	175	191	415
6月	4,956	2,212	793	162	200	199	425
1932年 1月	4,416	2,808	588	472	351	352	215
6月	3,919	3,218	663	503	394	357	214
9月	4,193	3,241	678	509	416	359	214
10月	4,264	3,250	678	509	416	363	214
11月	4,340	3,267	678	493	415	362	213
12月	4,508	3,264	583	477	415	361	213
1933年 1月	4,548	3,205	619	477	412	365	213
2月	4,344	3,160	735				213

日本に、断じて悲観もしない。悲観はしない、然し吾々は「どうにかならう主義」であつてはならない。今、祖國日本の背にかかつてゐる大問題は、何と云つても、米國との對立だといふことは、明々白々争ふ餘地のないことである。吾々は滿洲國問題に就いて、支那と争つた、そして國際聯盟と争つた。だがそれはたゞ支那及び國際聯盟を通して、米國と争ふたに過ぎなかつた。支那代表顧維鈞は、同時に米國代表ウィリントン・クラークであつた。否、寧ろ米國代表

ウィリントン・クラークが、支那代表顧維鈞を假裝したに過ぎなかつた。吾々は既に熊襲と新羅との歴史を知つてゐる、そして今、支那及び聯盟と米國との歴史を知らねばならない。日本は國際聯盟を認識不足と攻めた。だが又自らも米國のオブザーバーをオブザーバーと認識した、そこに大なる認識の不足があり、日本の抗議は、たゞ聯盟側にチャンチャラ可笑さを感じしめるに役立ち得たのみであつた。今私は、その認識不足の抗議を、聯盟より祖國日本の識者に反投せしめる、未だ十三對一、四十二對一を、米國對日本、即ち一對一の假裝であつといふことを認識し得ない、大なる認識不足を。茲に吾々は靜かに、米國對日本、即ち米國の東洋政策を考へて見る必要に迫られる。

米國の野望的東洋政策

現在米國は明白にその飽くなき經濟的野望を、東洋の天地に伸さんとしてゐる、而もその野望たるや決して昨今に始つたものでもな

く、又一時的出來心でもない。米國は長き年月の間組織的に計畫し、それを國是として、その實現を期してゐるのである。

米國が日本に向つて接觸して來たその最初に於いて、既に領土的野望を包藏してゐた。一八五三年、即ち吾が嘉永六年六月三日、彼のペルリが、一本の白旗をその國書の添へて、日本に通商を強請したのであつた。そしてその國書は、日本が各國とその通商を肯じないといふことは、天理に背くも甚しき者であつて、若し日本が其國法を盾に、この天理に背くならば、米國は天に代り干戈を以つて、その罪を問ふであらう。けれども若し戦となるならば、必ずや日本の敗北に歸するは明であつて、その時この白旗を押したてて降服するならば、米國は砲を止め艦を退けて、和睦を講ずるであらう、と脅迫したのであつた。當時の幕吏は、實際その黒船の禮砲にさへ驚駭した、然しながら彼ペルリも亦日本人の人切庖刀に恐怖し、大統領ヘルモアから受け來つた所の、日本征服の秘密命令をば實行し得なかつたので

あつた。

又この正義の國米國は、一八九八年天に代つて布哇を蹂躪し、更にその翌年西班牙に天理を教へて、その比律賓を掠奪した。或る共產主義者が、「人の物は俺の物だ、俺の物は俺の物だ」と公言してゐたが如く、米國は「亞米利加人の亞米利加である、然し亞細亞は亞細亞人の亞細亞ではなくつて、又亞米利加人の亞細亞である」と主張し出して來た。彼等はそのモンロー主義によつて、亞米利加大陸に及ぶ歐羅巴の勢力を巧に排除して、その間に自國の霸業を亞米利加大陸に於いて確立し、轉じてその霸權を東洋の天地に伸長せんとして來た。又彼等はその肥沃なる曠野によつて得たる過剰せる生産品の販路の爲に、東洋にその市場を求め出して來た。ここに彼等はマルコポーロの見聞録以來東海の蓬萊國として、世界から微笑を以つて迎へられてゐた日本をば、白眼視するに至つたのであつた。

彼等は考へた、東洋の經濟界に於いて最も恐るべき者は日本であ

る、故に日本をして偉大なる勢力を有する國家とならしめてはならない。日本は依然として世界の小公園であり、キモノの國、ゲイシャ、ガールの國として、白人愛玩の對象物であらねばならない。今、この日本を永久に弱小國の地位に監禁せんとするならば、必ずやそれを亞細亞大陸より遮斷して、孤立の地位に陥らしめねばならない、と結論した。

彼等はこの結論に従つてその政策を立てた、ルイス・フイシアアのいふが如く、それを國是となし、傳統的的政策となして來た。例へば日露の戦争に於いて、日本軍が連戦連勝するや、彼等は日本軍が露西亞の勢力を極東より全く驅逐して、そこに確固たる地盤を築きあげんことを憂慮し、大統領ルーズベルトは、好意に名を借りて、日露の間に立つてその仲裁をなし、露西亞全權が覺悟して來た所のものよりも、より、輕き條件にてその媾和條約をなさしむるに努力し、時に日本の全權を威嚇し、日本政府の暗號電報の漏洩と相俟つて、その目的を達

成せしめ、遂に一文も拂はなかつた、そして樺太南半は、日本のものを日本に返したまでだ」とウイッテ伯をして壯語せしめたのであつた。而もロシアをして一文も支拂はしめなかつたのには、米國に大なる魂膽があつたからである。それは、日本をして戦後極度の財政難に逢着せしめる爲であり、そしてその財政難に乗じて、米國の鐵道王ハリマンは、南滿洲鐵道の買収をば計畫したのであつた。彼は明治三十八年の末、即ちポーツマスの和義進涉中に來朝して、米國公使グリスカムと共に朝野の名士を説き、十月十二日首相桂太郎との間に買収豫備契約をなし、即日歸國の途に就いたのであつた。然るにそれより三日後外相小村壽太郎の歸朝となり、同氏の買却絶對反對によつて、ハリマンが桑港到着前にその假契約をば取消し、米國の野望は水泡に歸せしめられたのであつた。

でも殆どそれと同時に、米國は又排日問題によつて、日本の背面攻撃をやる事を忘れなかつた。一九〇五年、即ち日露戦争の末期、米國

に於いて亞細亞人排斥協會が組織され、やがてそれは日鮮人排斥協會とその名稱を變更して、太平洋岸の各地にその支部を増設し、日鮮人、殊に日本人の排斥をば煽動し、晚香市に於いては暴動を起し、桑港に於いては所謂日本人學童問題を惹起して來た。次いで一九〇八年の所謂紳士協約となり、日本労働者の渡米を禁止し、布哇より轉航を嚴禁した、時に在米日本人の總數は僅に十萬三千に過ぎなかつた。この紳士協約によつて暫時満足してゐた米國も、一九一五年に至つて、ウエツプ法案を加州議會に通過し、外國人の土地を所有することを禁止し、且つ借地權に多大の制限を附して、優秀なる日本農民をその耕地より追放せんとしたのであつた。更に又バーネット法案を中央議會に提出して、寫眞結婚を禁止し、一九二〇年には加州の一般投票によつて排日法案を通過し、それによつてウエツプ法案を一層苛酷なるものと改惡した。又加州排日協會及び在郷軍人團は、太平洋沿岸十二州に外人土地所有權及び借地權制限法案の通過に努め、

遂にそれを通過せしめ、一九二三年には合衆國大審院は、その判決によつて、この加州排外法を有效なりとし、加ふるに日本人に歸化權なしと決定したのであつた。

斯くして「米國化せざる日本人」をその排斥の標語となし、合衆國中中央議會は極端なる日本人渡航の制限をなす排日法案を通過して、ここに地方的であつた排日運動は全國的となり、呼び寄せ渡航者を全然禁止するに至つたのであつた。遂に吾々日本人は、一九二四年七月一日を以つて、その皮膚の黄色なるが故に「劣等人種」としての烙印を、その額に打込まれ、日本移民はやがて北米の土地より、全く掃蕩されねばならぬが如き氣運となつて來たのであつた。吾々はいまだにその痛みに堪へ得ない、否、寧ろ吾々は重なるその屈辱に堪へ得ない。

吾々がこの太平洋東岸の屈辱を振返つてゐる間に、彼のハリマンは、再び奉天總領事ストリートと共謀して、滿洲に於ける鑛山、森林、農

業の資源開發及び鐵道建設の目的を以つて、米支合辦の滿洲銀行設立を計畫し、米國財團より二千萬弗の借款を起さんとしたのであつた。然し一九〇七年の米國の恐慌と、一九〇八年西太后の崩御とによつて、その計畫は失敗に陥つた。

すると米國はその國務卿ノックスをして、一九〇九年十一月、滿洲に於ける日本の特殊的地位をば、一舉にして覆滅せしめよう、と企圖せしめたのであつた。ノックスは、滿洲に於ける一切の既成鐵道をば支那に買收せしめ、これを永久中立地帯となし、借款團によつて管理し、更に滿鐵と平行する一線、即ち錦愛鐵道を新設せんことを提議したのであつた。そして米國はその買收及び新設の爲にする資金の貸附けを、支那になすことによつて、日本の地位に自國をして取つて代らしめんと企劃し、そして滿鐵買收の不可能なる場合には、滿鐵の競争線たる錦愛鐵道を、英國を誘ふて外交的に支持せんとしたのであつた。けれどもこの提案は、日露の峻烈なる反對と共に、列國の

承認を得なかつた。そこでストレートは、一九一〇年、英佛獨米の四國の共同力を以つて、日露の力を壓倒せんとし、所謂四國借款團を組織し、四月十五日支那政府と、支那の幣制改革及び産業開發借款を締結し、滿洲に於ける合辦事業を獨占し、日本の滿洲に於ける特殊權益を蹂躪せんと目論んだのであつた。

然しこの目論見は、同年十月武漢革命の突發によつて頓挫し、次いで袁世凱が第一次大總統となるや、その六千萬磅の「改造借款」に應ぜんが爲に、日露を加へて六國借款團の成立となり、日露は本借款が滿蒙に於ける兩國の特殊權益を損傷するが如き方途に使用されざることを條件として、それに應諾したのであつた。故に米國はその初期の目的、即ち日本の滿蒙に於ける權益を覆滅するが爲の手段に、その借款團がなり得ざるを知るや、自らその主唱者でありながらも、その對内的事情を口實として、六國借款團を脱出したのであつた。

一九一四年八月、日本が獨逸に最後通牒を送るや、米國は、日本に、民

國の領土保全と、各國の機會均等と、膠洲灣をば支那に還附すること、膠洲灣の領域外に於いて行動する際には、先づ米國と協議すること等を忠言し、一九一五年一月、所謂二十一箇條問題に就いて日支の交渉となるや、暗に支那政府を支持して、日本政府に平和的解決を忠告し來つたのであつた。そこで日本は滿蒙に於ける日本の權益を明にして、米國の諒解を求め、所謂石井ランシング協定によつて、支那特に接壤地域たる滿蒙に於ける日本の特殊權益を承認すると同時に、支那の領土保全及び機會均等主義を維持することを聲明した。でもそれは歐洲大戰の末期ではなかつたか？ そしてともすれば日本の實力が、米國を壓倒し勝ちの時代であつたからである。

米國の陰謀遂に凱歌をあげる

然し米國の陰謀は、遂に凱歌をあげるの機會を發見した。正義の神自由の神であつた大統領ウイルソンは、その國是に従つて日本の

勢力を、亞細亞大陸から如何にして驅逐するかに努力した。彼は巴里會議に於いて支那と策謀し、日本を青島から無報酬に追拂ふに成功した。又彼は歐洲大戰の媾和原則十四ヶ條に、小國獨立民族自決を加へることによつて、第二のアルサス・ローレンを歐洲列強の間に介在せしめ、それによつて歐洲列強の力を相互摩擦の中に消耗せしめ、その勢力の當分東洋に及ばざることを計ると同時に、朝鮮半島に於いては、米國宣教師等の煽動によつて、所謂萬歲事件を起し、大統領ウイルソンは遠からず米國の大艦隊を率へ來つて、朝鮮を獨立せしめると流言し、愚昧にして「獨立」の何たるかを考へず、自由平等の國米國に於ける黒奴の如何に不自由にして不平等であるかに思ひ至らず、布哇、比律賓のそれを顧慮するの暇をも有せざる人々をして、徒にその暴舉を敢てなさしむるに至つたのであつた。

又、米國は一九一八年七月、新に日、英、米、佛四箇國の對支借款團を組織し、支那に於いて公募する總ての借款は、これを新借款團の事業と

し、借款團員の有する既得優先権を、總て新借款團に提供せしめ、將來に於ける政治的經濟的借款は、悉く新借款團に於いて獨占することによつて、日本を壓迫することに成功したのであつた。

この成功に勢を得たる米國は、一九二一年華府會議を主宰して、自國が唱道して眞先になしたる西比利亞出兵に反對し、又國務卿ヒューズは、何等直接の關係なき北樺太の撤兵を極力主張し、支那に對する二十一ヶ條を問題として引出し、山東問題に於いて日本の讓歩を餘儀なくせしめたのであつた。彼等は又國際間の信義と道徳とを裏切つて、暗號電報を盗讀し、日本全權をして日本は過去に於いてこれ無かりしが如く將來に於てもその力に於いて、米國若くは英國と其程度を同じうする一般的海軍設備を保有することを要求するの意志を有せず、との聲明をなさしめ、五・五・三の比率に成功したのみならず、日本に對しては太平洋上に要塞を築造することを防遏したのであつた。單にそれのみではなかつた。米國は太平洋に於ける自

國屬領保全の目的を以つて四箇國條約を締結し、支那の門戶開放を目的とする九箇國條約を調印せしめ、滿蒙に對する日本の特殊權益を承認したる石井ランシング協定、米國の好まざる日英同盟を廢棄するの運命に、日本を陥れたのであつた。

米國は又支那大陸に於いて、絶えざる日貨排斥の原動力をなしてゐた。歐洲大戰が終局を告げた時に、米國の實業家が口を揃へて、歐洲はもう駄目だが、吾々には四億の人口と四百萬方哩の面積とを有してゐる支那がある。この支那に嚙り附いてゐさへすれば、今後十年間は安全にやつて行ける。その内には又歐洲の野原にも芽生がし、景氣も直るだらうと云つたことを思ひ起さねばならぬ。實際、歐洲大戰後、誰れ云ふとはなしに、今後は太平洋の問題だと云ふことになつて來て、世界の經濟的視線は等しくこの太平洋に集つて來た。そして殊にそれが支那に集中されて來たのであつた。

然し歐洲諸國は未だ戰時の創痍より恢復するに急であつて、其手

を東洋にまで延す餘裕をもつてゐない。獨り獨逸は敢然その敗殘の骸に鞭打ちながら、工業製品をマルク相場の下落に乗じて、世界の市場に送り出し、非常の勢を以つて世界に於ける聯合國側の市場を蠶食して來た。だがそれは佛蘭西及び白耳義のルール地方侵入によつて、再びその工業の心臓を打貫かれて了ふことになつた。そしてそれを英國初め多くの聯合國が黙認し、否、却つて暗にそれを獎勵するやうな態度に出たのである。それは何故であるかと云ふに、このルール地方、即ち獨逸商工業の心臓を占領するといふことは、獨逸の商工業を根柢より覆し、獨逸人が「大戰では敗けたが、戦後の經濟戰ではキツトこの仇を討つて見せる」と壯語したのを、全く水泡に歸せしめる秘策であつたからである。果せるかなルール地方の占領は、多大の犠牲を拂つた佛白に與へた利益よりも、英國に與へた利益がより大であり、鐵材の騰貴となり、染料及び砂糖の暴騰となり、吾が日本にまで所謂中間景氣なるものを作るに役立つて來た。又この事

は他方、米國に對してその虎視眈々たる東洋市場より、獨逸商品を驅除し、その競争者たる大敵の一を葬り去る結果を齎したのである。然しながら、これが爲に米國がその競争の唯一の相手方として、その矢表に真正面に立つものとして、一層日本を明確に且つ強烈に意識し、目の上の瘤として有らゆる手段を盡し、以つて日本を遣付けて了はねばならぬ、と考へるに至つた。

今、地理的關係からしても、産業の状態からしても、即ち運賃の點に於いても、勞銀の米國より日本が安く、従つて生産費が安い點に於いても、一、支那に於いて日本の經濟的優位が発見されることは明であり、現に如何に日貨排斥が叫ばれてゐても、算盤玉で動く支那商人は、レットルを貼代へて、ドシドシ日本品を持込まざるを得ないのである。それ故に米國としては、倒底この現状を坐視するに忍びない。必ず茲に砲彈戰に出るか、或は思想戰換言すれば宣傳戰を張つて、この經濟戰を助けなければならぬ。

吾々は、進んで米國の宣傳戦を見る。

米國は、日本内地、朝鮮、支那に於いて、教會を設置し、教會に附屬して學校、孤兒院等を經營してゐる。そしてそれは外見確に文化事業である。然しながらこの計畫たるや、嘗つて獨逸が米國內に幾多の獨逸帝國を建設し、アングロサクソンの米國を、ゲルマンの米國として了ふことを目論み、獨逸教會を設置し、教區學校を經營し、獨逸移民の子供を總てこの學校に入學せしめ、「獨逸の文化が世界第一である」と高調したのに範を取り、「米國文化世界第一」をモットとして、世界殊に東洋の米國化をなさんとするものである。そして彼等の多くは米國を世界の理想國の様に吹聴し、排日を主眼としてゐる。彼等が支那で經營してゐる學校では、支那歴史の授業時間よりも米國史のそれが多く、従つて支那に於ける排日、特に日貨排斥運動、朝鮮に於ける獨立運動は、前述の如く、その殆ど總てが米國の教會或は教會附屬の學校を根據地とし、その生徒を主謀者とし、牧師がその裡面に活躍し

てゐたのである。現に日支條約二十一箇條の廢棄には、支那當局よりも寧ろ駐支米國公使が、力瘤を入れてゐた、と云はれてゐるではないか？ そしてこの運動は決して一時的ではなく、永久的に繼續せんとしてゐるといふことは、孤兒院に收容する子供をば、男子よりも多く女子を選んでゐることによつて明にすることが出来る。何故ならば女子に比して男子は忘恩的であるからであり、若し女子を養育する時には、當然その夫も、その子供もまた米國化し、米國崇拜者とならしむる結果を齎し得るからである、と考へたからである。又米國は、日本内地に種々なる宣傳費を支給してゐる。某傳道會の如きは、年々三十五萬圓づゝの社會事業費を日本の教會に支給してゐるが、それは多く社會事業費とならずして、社會運動、殊に勞働爭議の費用に轉用され、そして勞働賃銀の釣上げ及び生産量の阻止が策謀されてゐるのである。

再び私は確言する、支那に於ける日貨排斥は、米國の東洋政策にそ

の根據を置く。

一九二八年四月十三日、米國は、不戰條約をば先づ自國と緊密なる利害關係なき佛國に提案し、次いで英、獨、伊を誘ひ、以つて世界の大勢、即ち世界的デモクラシーなりとして、日本を引入れ、世界十五箇國間に於ける多邊的不戰條約を、各自國の人民の名に於いて、八月二十七日調印せしめたのであつた。そして無論、米國の目的物たるや、他の十三箇國にあるのではなくつて、一つに日本にあつた。

この不戰條約を濫踏みとして、米國は一九三〇年一月二十一日、日、英、佛、伊の四國に海軍々縮案を提議し、これ等の五箇國は三ヶ月に亘つて所謂倫敦會議を開催した。而もまた米國の目的物たるや、一つに日本の海軍力にあつたことは勿論であり、曩に華府會議に於いて日本の主力艦に投げかけたる劣勢案を、更に進んでその補助艦にも投げかけんとしたのであつた。

そしてその日米妥協案、否、斷じて讓歩の餘地なしと中外に屢々聲

明したる所謂三大原則をも放棄したる日本の妥協案に對して、米國の脱帽が行はれた。——君は脱帽の歴史を知るか？ 脱帽は敵意を感ぜざる時に行はれる、敵を敵とも思はず全く見くびり切つた時に行はれたものであることを！ ——日本の補助艦はたゞ總括的といふことに於いてのみ、漸く對米七割に近い數字を保ち得たが、その潜水艦に至つては、悲惨、現有勢力たりし七萬八千五百噸を五萬二千七百噸に切下げられて、日米對等となり、即ち米國現有力の五割弱を、一枚の舌によつて撃沈されたのであつた。又大型巡洋艦に於いては、日本は一九三六年まで完成せるものは對米の七割となるが、米國は同年までに完成せしめない範圍で、一九三三、三四、三五年度に、夫々一隻づゝ大型巡洋艦を起工することが出来ることになつてゐるから、同年以降の比率は日本に甚しく不利となるのである。この敗戰的ロンドン條約が、遂に四月二十二日に倫敦に於いて、調印せしめられたのであつた。斯くして米國は、日本に平和的鐵條網を完全に投げ

かけるに成功したのであつた。

背面にある米國々策

この次ぎ次ぎへの鮮なる日本の退嬰振りを見た支那は、否、排日の元兇米國は、日本與し易しとなし、支那に於ける日貨排斥を一進して、侮日抗日の運動をば煽動し出し、又支那國民黨は、その國內統一の爲にする對内政策として國權回復運動を高調し、指呼の間にある日本をその對象にあげ、「打倒日本帝國主義」をそのスローガンとし、遂にその條約を無視し、日本の權益を理不盡に蹂躪し、公然國家の教育方針として抗日精神を教へ、侮日の行動を獎勵し出して來たのであつた。

斯くして日支の懸案は二百餘有に昇り、クレマンソオが嘗つて、不斷の讓歩政策とは、敵をして益々多くを要求せしめること以外の方
法ではない。だから讓歩をこれ事とするものは、個人でも國家でも、悉く自滅に終る外はないのだ」と言ひしが如く、日本もまた支那に押

されて、知らず知らず自滅の道をば辿り、その滿蒙政策に於いて、甚しき行詰をば生ぜしめて來たのであつた。



—！を下足よ見・傳宣—

六日に亘る反支那人騷擾となつた。すると、十五日上海の反日ポイ
コットとなり、十七日日本のチチハル總領事館に、「中村大尉死す」とい

果然、昭和六年
七月一日及び二
日萬寶山事件と
なり、支那人によ
つて朝鮮人農夫
は、或は虐殺され、
或は追放された。
そしてその報道
の朝鮮各地に傳
はるや、三日より

ふ情報が傳へられ、二十六日には奉天に於ける反日ボイコットとなつた。然るに八月十七日、中村大尉はその實支那正規軍に虐殺されたりと報ぜられ、更に十八日青島に於ける日本人の愛國團體は、支那の暴民によつて故なくして襲撃せられた。九月十日となり、日本の林奉天總領事は、中村大尉が支那正規軍に虐殺されたるの事實を握るのに及び、その責任をば支那奉天當局に問ひ、支那は九月十四日猛烈なる運動の功を奏して、國際聯盟の理事國に選任せられ、十六日中村大尉虐殺の責任者關玉衡は、奉天に護送され投獄された。

そこで或はその事件は平和裡に解決されそうにも見えた、でもそれは支那人の常套手段であり、敵に痛撃を喰はせんとすれば、その直前に弛みを與へ、それによつて敵に油断を生ぜしめんが爲の陰謀であつたに過ぎなかつた。危し！日本よ！果せるかな十八日支那の正規兵は、柳條溝に於ける滿鐵線路の破壊をば敢行して來たのであつた。必然自衛權としての應戰が日本守備兵によつて、營まれ

ねばならなかつた。動かざれば林の如く、動くや疾風の如き日本軍は、寡兵を以つて能く支那の大軍に當り、十九日奉天をば全く占領したのであつた。然るに一度敗戦となるや、支那はかねての設計に従つて、直ちに國際聯盟及び米國に向つて助けを求め、日本に向つて抗議を提示して來た。でも日本軍は、不信なること匪賊の如き支那軍によつて脅威されつゝある日本の權益を自衛するが爲には、滿鐵沿線の諸都市を占領せねばならなくなり、十九日一舉にその占領を強行し、二十一日進んでは吉林を占領して、所謂滿洲事變の勃發となつて來たのであつた。

支那は又同日即ち九月二十一日、國際聯盟支那代表施肇基をして、國際聯盟規約第十一條によつて、滿洲事變を國際聯盟に訴へしめ、二十二日及び二十三日の國際聯盟理事會の開催となり、二十八日には奉天舊勢力によつて、錦州政府が樹立された。十月三日、支那は國際聯盟及び米國に向つてオブザーバーの派遣を求め、七日米國はその

オブザーパーを奉天に遣し、八日日本軍は錦州の爆撃を敢行し、九日日本は支那の反日ボイコットに對する抗議を支那になし、十一日米國は日本軍の錦州空撃に對して覺書を送り、斯くしてめまぐるしき事變の發展となつて來たのであつた。だが私は、その經過に就いて一々記述し行くの餘白をここに持つてゐないし、のみならずそれは、餘りにもまさまざしく印象づけられてゐる、既知の事實に屬してゐるから、その必要もなからう。

兎に角、十月十三日より二十四日に亘る第二次國際聯盟理事會に於いて、米國オブザーパーの問題及び日支問題調査委員派遣の問題が議せられ、帝國外交は無援孤立に陥り、所謂十三對一の結果を生じ、十一月八日には、前支那皇帝溥儀氏の天津脱出となつた。年を越えて一九三二年一月九日、上海に於いて發行せらるる「民國日報」は、畏くも日本皇室に關して不敬なる論説を掲載し、十八日、支那暴民の日本僧侶を傷害せる事件上海に發生し、二十日再び上海に於いて日支人

の示威運動の間に衝突が起り、二十一日國際聯盟はリットン卿を委員長とする日支紛争事件の調査委員會を組織し、二十八日には支那十九路軍の日本海軍守備隊の攻撃となり、遂に上海事變が捲起されるに至つたのであつた。

二月十日、日本陸軍の上海上陸となり、十八日東北行政委員會によつて、東北四省の獨立が宣言され、二十九日聯盟調査委員團の東京到着となつた。三月一日には、滿洲國の建設が宣言され、十六日には、長春が新京と改名されて、滿洲國の首都とされた。四月九日調査委員團は北平に到達し、二十三日には奉天に至り、五月一日には新京に至り、三十日北平に向つて滿洲國から去つた。そして七月四日には、再び東京に來り、日本をして讓步せしめんとして、荒木陸相、内田外相との會見を重ねたが、成功を見ずして、十五日リットン卿は東京を去り、二十日北平に到着、北載河の提供されたる別荘にあつて、四十有三日を費して報告書を起草し、九月四日に至つて北平を去つたのであつ

た。同月十五日、日本は滿洲國を正式に承認した。三十日には、所謂
リットン報告書が、日支兩國に交附され、十月二日にそれが公表され
たのであつた。

だが見よ！ その報告書は支那當局よりも、より米國當局によつ
て満足の意が表されたではなかつたか？ それもその筈であつた、
そのリットン報告書が起草されるに當つて、リットン卿を誘惑指導
したものは、ウイリントン・クレーであり、クレーを支持し監視したものは、
米國委員マッコイ氏であつたからである。傳へられてゐる所によ
ると、北平に於いて報告書起草中に、リットン卿が餘りにも不正に支
那の肩を持ち過ぎたので、佛國委員クロードル氏が、大いに憤慨して
席を蹴つて立つた。そこで大騒ぎとなり、他の委員等の調停によつ
て俄に全體の調子を修正した。然るに又其時ウイリントン・クレーの
策によつて、急に米國委員マッコイ氏がその席を避けて了つた、と云
ふことである。而もリットン報告書の主張する所は、同年二月二十

三日、米國國務長官スチムソンが強調してゐる、—不戰並に九箇國條
約侵犯に依り齎らされたる状態、條約並に權益を米國は承認するの
意志なし、—とする趣旨を支持し。又五月五日國務次官カスツルに
より、フーヴァード・ドクトリンと命名して闡明せられたる、—不戰條約は
國際紛争解決の準繩であり、戦争防止の爲戦争又はボイコット等の
非常手段を採らない。そして戦争防止の最大良策は、戦争の結果を
無効にするにある。だから米國は不戰條約その他の條約侵犯に依
つて得たる結果を認めない、—と言ふことを、その骨子とし、ドクトリ
ンとしてゐるではないか？ のみならず、恰も日本を侵略國視して
ゐるではないか。

總ての事實と總ての正義とを無視して、一意、日本の勢力を大陸よ
り驅逐一掃する」と云ふ、米國國是の爲に書かれたるリットン報告書
—而もそれは調査報告の權限を逸脱して、その解決方策をも勝手に
注文し居れる報告書—に、勿論、日本はそのまま、賛意を表することは、

絶対に出来得ない。そこに又米國の不安があつた、それ故に米國は「數」によつて、ひた押しに日本を押さんとした。今、私は所謂四十二對一の樂屋を見ることにしよう。

事情通の報じてゐる所によると、昨年の暑中休暇あけ、リットン報告書の發表される前後に亘つて、各國軍縮全權が壽府に歸り、會議の始まるまでの幾日かを、打合せ、諒解等と稱して、互に往復會談に費してゐた時、米國の軍縮全權ノルマン・デビスは、その貴重なる時間をば、大國側即ち日、英、佛、伊等の海軍國側との折衝に費すよりも、寧ろ小國側との往復會談に費してゐたのは、見通し得ない事實であつた。そしてその小國側は、海軍問題に大なる關係のない筈のチエツコのヴェネシユ代表、瑞西のモッタ代表、スペインのマダリアガ代表等であつた。何故ならばチエツコには海軍はない、瑞西には軍用のモーターボートが七隻あるのみであるし、西班牙も海軍國としては、今はものの數には入らない。

このホテル・ベルグの三階で前後八回に亘つた異様の會合を佛國の新聞が批議したので、米國の新聞は、あれは戰債問題の會合だ、と云つたが、然し、瑞西も西班牙も大戦中は中立國であつて、戰債と稱するものはない。成程、チエツコには建國資金の借金はあるが、あの際特に大に折衝を必要とする程の、それも戰債ではない筈である。

間もなくデビスは軍縮會議の半途で壽府を去つたが、この暑中休暇あけの會合後、小國側の反日策動は愈々強烈となり、殊にチエツコ、スキス、スペイン等が、その策動の中堅をなして來た。當時佛國のエリオ内閣は、この小國側の策動を制止せんとし、その傘下にある所謂對獨保障國のポーランド、チエツコ、ユーゴスラヴ、ルーマニア等の小協商國に對し、その對日態度の緩和を試みたが、殆ど何等の効果がなかつた。英國の外交評論家オスワード・リーの云ふ所によると、この際小國側が米國の政策に加擔する事は、聯盟の條文支持で、彼等自國の自衛といふ立派な言分があると同時に、その外に大きな利益の打

算がある。「彼等小國の代表にとつては滿洲問題は、實に本職と内職とのいゝ書入れ時を提供した」ものであるから、小國側の代表等が佛國の壓迫などを聽入れる筈がないのださうである。

では、内職とは何か？ あゝさうだ、吾々はそこに倫敦會議の當時、日本に三百萬弗を持つて來たと風評されたカスツル事件を、何故か追憶せしめられる。私は、最早これ以上言を費すことを潔としない。勝負は既に米國軍縮全權デビスが壽府を去つた時に決定してゐた。そしてその間英雄日本全權松岡洋右氏の祖國日本に對する放送が繰返されて、米國の既定方針通りに、國際聯盟總會は運ばれて行つた。四十二箇國の假面を有する米國に日本は遂に敗れて、光榮ある孤立に立つた。

今年三月二十七日、日本は正式手續を履んで聯盟の脱退を執行したのである。

斯くしてそこに残る問題は、米國が日本を軍事的に壓倒するか？

はた經濟的に壓倒するか？ の二者であらねばなるまい。そして軍事的壓倒策は軍縮會議であり、又二年後に於いて日本の南洋委任統治地を奪還することであり、畢竟するに、日本海軍の劣勢を作為することである。そして經濟的壓倒策は、言ふまでもなく、現在倫敦に於いて開催せられつゝある世界經濟會議でなければならぬ。

赤道直下の日本

先づ吾々は日本の南洋委任統治問題を一瞥して置かう。

私は卒直に云ふ。吾々日本人は考へる、一體今更日本の南洋委任統治を云々するなんて、甚だ心外である。抑南洋の委任統治權たるや、歐洲大戰に日本が參加して、拂つた多大の犠牲の代償ではなかつたか？ 若し日本が歐洲大戰に參加せず、獨逸の軍事的策動を、短日月の間に東半球から一掃するに努力しなかつたならば、その結果たるや俄に逆賭し難きものがあつたではないか？ 必ずや獨逸は青

島及び南洋諸島によつて、印度を攪亂し、濠洲及びニュージランドを威嚇し、佛領印度支那、マダカスカル、香港、シンガポール、コロンボ等を砲撃し、更に南阿に迫つたであらう。そして爲に軍隊の輸送は阻止され、軍需品及び食糧品は洋上において、或は捕獲され或は撃沈せしめられたであらう。而もその混亂に乗じて起るものは、印度の革命でなかつたとは、誰が保證し得るか？ ではそれは單に大英國の没落であるばかりでなく、聯合國側の敗滅を結果することは明々白々ではないか？

然るに日本の義侠心は、よし英佛は、今日ではそれを日本の要らぬおせつかいであり、野心である、と云ふかも知れないが、—南太平洋から印度洋、はては地中海にまで、その軍艦を進めて獨塊の海軍力を壓倒するに盡瘁したではなかつたか？

だのに米國は何だ。大戦の勝負が九分通りついて了つてから、大袈裟に百萬の軍隊を巴里に送つた、たゞそれまでではなかつたか？

その中何人が戦線に出たと云ふのか？ 笑はせてはいけない。でも厚顔なるウキルソンは理想家の名にかくれて、國際聯盟を擔ぎ出して來た。そこでオヒトヨシの日本は、唯その顔を立て、やるが爲に、委任統治といふ名を承諾してやつたまでである。實に南洋の諸島は、日本海軍が實力によつて占領したる領土ではないか？ 聯盟脱退後と雖も、勿論日本の領土たることにおいて、何等問題がない筈である。然るに今それが問題になるとすれば、洵に奇怪千萬であり、もつての外である、と吾々日本人の正義と熱情とは確信する。この確信、この熱情の前には、よし萬一それに背馳する法理があつたとしても、それは屁理窟であり、空論である。それは國際聯盟といふカラクリによるトリックであり、筈である。吾々は敢然實力によつても、その筈から這上らねばならない、と誓ふ。—これが吾々日本人一般の赤裸々の思想であり、現時の信念である。

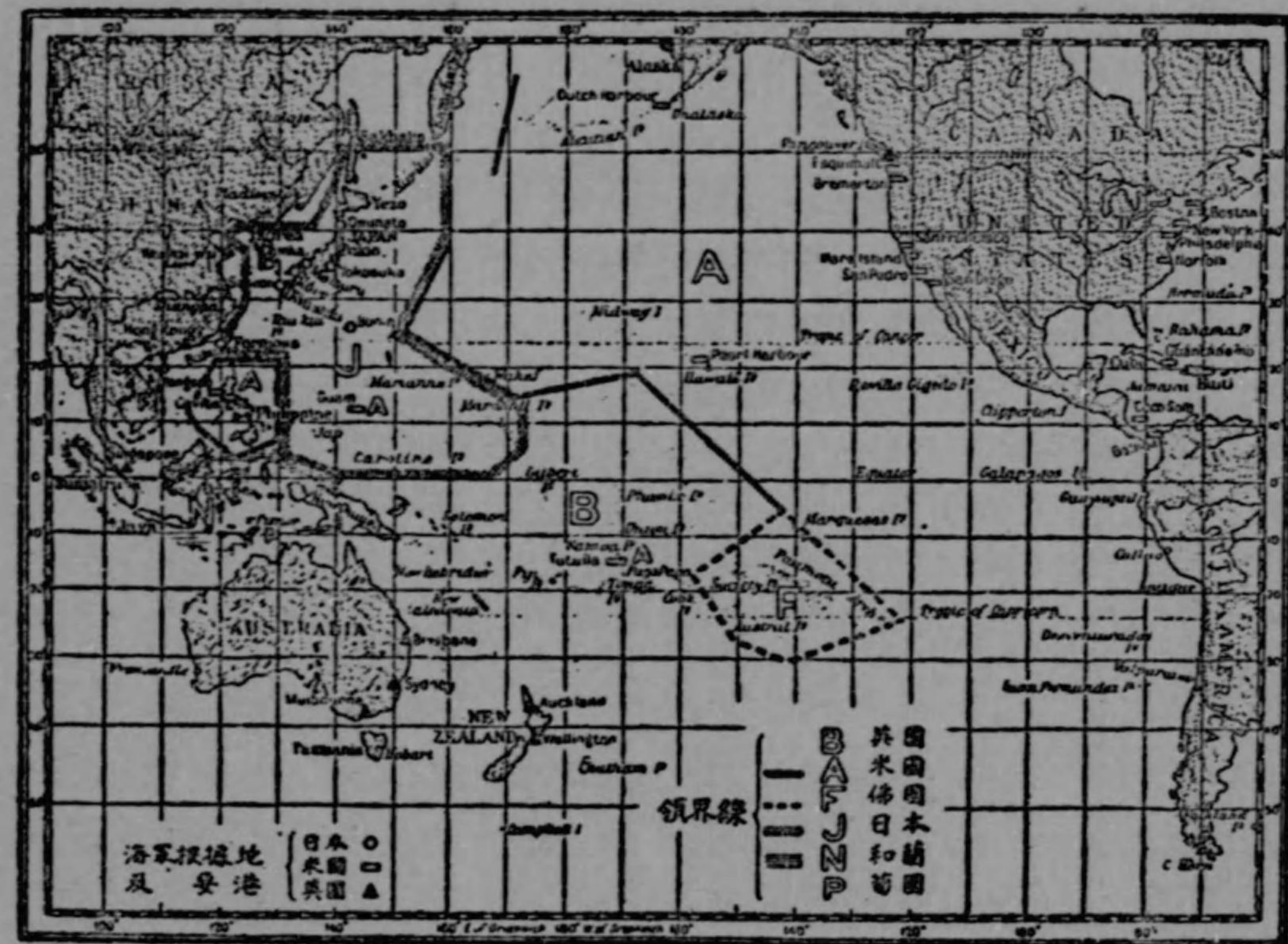
でもまた、吾々は白人の確信する所を知らねばならない。白人は

一般に確信する、世界の主人公は白人であると、そしてこの問題は、日本對聯盟或は英、米、獨、佛の問題ではなくつて、實に一步進んで有色人種對白色人種の人種的階級的争闘の問題であることを、吾々は明確に認識して置く必要がある。

佛蘭西のカウデル教授は、この將棋盤(太平洋)の上に同じい力を有してゐる三つの駒(それは英、米、日である)があることと云ふことは、疑ふ可からざる事實である。そして彼等は三諫みの状態で、どれもが動くことは出来ない。華府會議はその問題を皮相的に解決しようとしたに止まつてゐる。今、よくそれを觀察する時には、そこに有史以來未曾有の人口學上の煩悶に、吾々は直面せざるを得なくなる。だからこの太平洋沿岸を眺める時には、外交上の小將棋の一手二手に目を呉れてはならぬ。…考へるに大戰突發以前には、太平洋上の重要なる島は、殆ど白色人種の手に歸してゐた。然るに大戰はその状態をば變更して、赤道以北の獨領即ちカロリン、マーシャル、パラオ及

ピマリヤナ群島をば、日本の委任統治に屬せしめた。そればかりではない、華府會議は、有色人種の國即ち日本に對して、太平洋上に要塞を築造することを防遏し得たが、然し結局白色人種の防禦線以内に有色人種の進路を作らしめることに妥協して了つた、といふことは、地圖を一瞥して容易に合點の行くことである。

そして米國の領土は餘りに遠く離れ過ぎてしまつた。フィリピン及びグアムは、今や敵(日本)の攻撃の真正面に曝され、華府會議において米國は、自分で自分の領土のフィリピン及びグアムに、新に要塞を造ることが出来ないように、自縛して了つた。それ故に白色人種がこの方面に有してゐる領土は、その危険に瀕してゐることを、誰でも拒み得まい。又濠洲大陸も非常なる脅威を受けてゐる。濠洲の北部は事實上無人地帯である。然るにその對岸たるニューギニアには、有色人種が多數に住んでゐる。この島は現在半分は英領で、他の半分はオランダ領であるけれども、白人の數は極めて少く、その島



の北端には直ちに日本の委任統治してゐる島々が迫つてゐるではないか？ だから明により悪くなつた。と彼は云ふのである。又米國のストウダアド教授も、この問題は白人連帯の問題であり、彼の日露戦争が、白人退潮の陸標であると云ふ。

吾々は、決してこの滔々たる反日思想の世界的氾濫から、自己を瞞着してはならない。

それ故に私は、依然として頑迷にいふ、問題は有色人種の擡頭に對する白色人種の人種的階級的嫉妬にあると。そして米國がその嫉妬の波を自己の國策遂行に利用せんとすることにゐると。

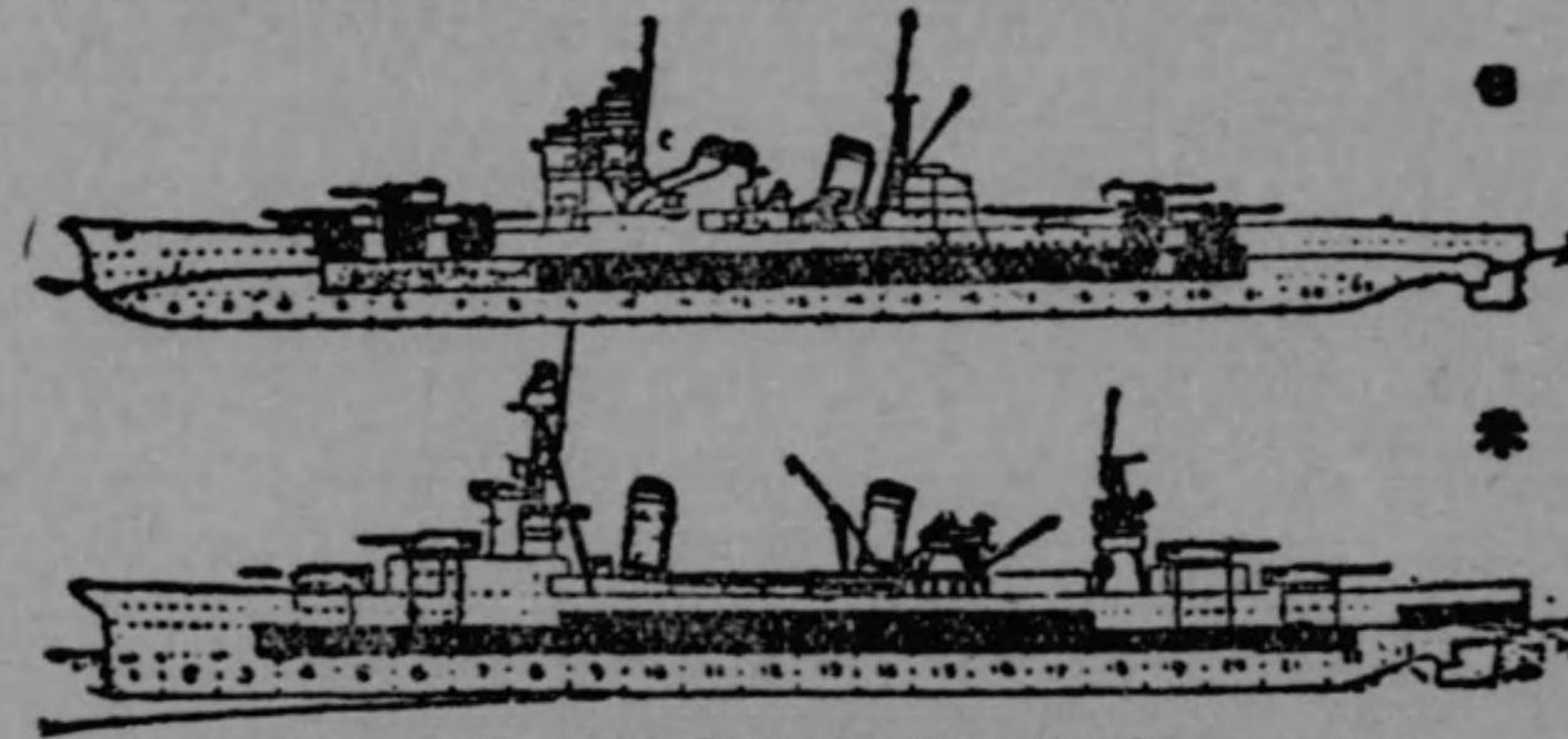
吾々日本人は、南洋の小群島に就いて考へる。それは大なるものではないぢやないか？

一八四八年西米戦争の始まる直前に、獨逸が西班牙政府を説いて、僅に八百萬圓でそれを買收したものでないか？ そしてその面積は二千方哩—四十五哩弱平方に當る—であつて、英國の太平洋上で委任統治する所の九萬七千方哩に比するならば、約四十五分の一に當り、米國領(フィリピン、ハワイ、サモア、グアム)の十二萬一千七十四方哩に比するならば、約六十分の一に當るに過ぎない。そのみではない、委任統治十五年間に、獨逸領時代には夢に見られない程の産業を完成し、土人の文化を近代の水平線にまで高めて、實に立派な治績を收めて來てゐるではないか？ と。

日米海軍主勢力一覽表

國別	艦種	隻數	總噸數	建造中	未起工	
日本	戰艦	10	298,400	—	—	
	巡洋艦	一等	12	107,800	—	—
		二等	19	90,255	2	2
	驅逐艦	一等	64	116,015	6	9
		二等	35		—	—
	潛水艦	一等	24	68,085	4	5
二等		36	—		2	
	航空母艦	3	61,270	1	—	
米國	戰艦	15	453,900	—	—	
	巡洋艦	A級	9	80,250	7	3
		B級	10	70,500	—	—
	驅逐艦	一等	196	257,120	—	11
		二等	46		—	—
	艦隊潛水艦	潛水艦	7	63,950	2	—
潛水艦		75	—		—	
	航空母艦	7	128,550	1	—	

あるからである。



日米一萬噸級巡洋艦比較

國別	隻數	排水量(噸)	主砲(8吋)	魚雷發射管	速力(節)
日本	8	10,000	10	12	33,00
米國	10	9,100	10	6	32,50

【艦名は下記の如し】

(日本) 妙高、那智、足柄、羽黒、高雄、愛宕、鳥海、摩耶
 (米國) ペンサコラ、ソルトレーキシチイ、ノーザンブトン、
 チェスター、ハウストンラ、ウスヅイル、シカゴ、ア
 ウガスタ、ポートランド、インディアナポリス

の煙幕陣であり、塹壕であり、それは實に東洋に君臨する天の浮橋で

然し白人はいふ。そうだ、その立派さがいけない。見よ！ アメリカの西海岸でも、お前等日本人は意氣潑刺として活躍し、非常の困難なる活動に堪へ、白人労働者の生活費のほんの一部分で生活してゐる。而もお前等はカルフォルニアの富源を利用した後、足を南に向け、常に新なる地歩を開き、メキシコ、中央アメリカ、南アメリカと、その西海岸地を、何時の間にか平和的に征服して行つてゐるではないか？ 恐ろしや！ 斯くして太平洋は數十年を出でずして、日本人の内海となり、太平洋岸の富源は悉く日本人の手に落ちて了ふといふことは、最早疑ひを入れる餘地のないことである。その時こそ米國が日本に、即ち白色人種が有色人種におじぎをする時である。だから今の内に日本の少しの足場でも、即ち南洋の委任統治地を掠奪し返さねばならぬと。これが彼等白人殊に米人の本音であり、確信である。而も米國にとつては、この南洋群島こそ—それ自身として、大した經濟的價値はないが—米國大艦隊が東洋に進出するが爲

見よ！ 米國軍艦の太平洋を往復して尙餘裕綽々たるその耐波性と其の航續力とを！ そして又併せて彼等の志が那邊にあるかを！

然し日本の海軍にも、列國海軍の驚異の的であり、その快速力とその戦闘力に於いて、世界に誇る一萬噸級巡洋艦がある。だから又ここに米國の常套手段である軍縮會議が必要となつて來るのである。

六十五對一の危機

靜に考へるならば、南洋問題或は軍縮問題は、米國國策を遂行する爲の過程に横つてゐる、過程的問題に過ぎなくつて、眞の目的は、繰返して云ふが如く、日本を東洋の市場から孤立せしめんとするにある。故に矢張りそれ等は、滿蒙問題に比して、第二次的であると云ふことは論を俟たない。では米國はこの軍縮問題、進んでは滿蒙問題に對して、必ず世界經濟會議に於いて、如何に日本を經濟的に壓倒するか

を策謀して來るであらう。

米國は云ふ、洵に世界は不安である。そしてこの不安排除の對策が、ロンドン世界經濟會議の眞の目的であると。而もその爲の豫備會商がワシントンに於いて、ルーズベルト、マクドナルド、エリオの三巨頭によつてなされた。私はひそかに考へる。嘗つて巴里の平和會議の開催に先だつて、ウイルソン、ロイド・ジョージ、クレマンソーの米英佛の三巨頭が、如何に連日その商議をば繰返したかを。で、それは何の商議であつたのか？ 勿論遅れて來る日本抑壓の商議であつた。石井、深井の兩代表は、徒に元老西園寺、牧野の轍を辿つては斷じてならない。

米國は今次の世界經濟會議に於いて、先づ金銀複本位制による國際的新平價を以つて、通貨の安定を策し、關稅率引上げの競争を廢止して、世界貿易の回復に努力するであらう。そしてそれが爲めには、米國はその戦債をモラトリアムし、或はその整理の敢行を以つて、英

佛をば自己の政策に追従せしめるであらう。

然し我々がここにしかと考へて置かねばならぬことは、圓爲替の安定問題である。米國は滿洲問題及び南洋委任統治に觸れないと述べてゐるから、不戰條約問題の際の外は、この問題に觸れないであらう。而も滿洲國は既に熱河を日本軍の協力によつて討伐平定し、頑寡執拗なる支那軍の對日滿武力抵抗は、遂に吾が關東軍の蹶起を促し、神速果敢なる作戰行動によつて、僅かに旬日を出でずして二十萬の支那軍を撃破して、早くも北平を指呼するに至つたし、又、ロシヤは、西部國境に脅威を感ずるの餘り、東部國境に平和を欲し、日本との不侵略條約締結を熱望する所から、ロシヤ國策にとつても、その經濟的價値に於いても、既に重要性を失つて了つた東支鐵道を、日本の保障の下に滿洲國に賣却せんとしてゐるし、そして若しその賣却が行はれるか、それによつてロシヤは、滿洲國を承認することとなるし、又交換條件として、ソヴイエト・ロシヤは、聯盟外に在つて聯盟の掣肘を

受けざるを以つて、滿洲國を承認するの用意を有するものである」と公言してゐる。

極東の事態は短日月の間に、斯く變遷して來た。それ故に米國は、強いてこの問題に、直接觸れることをば怖れる。で、彼等は五月十六日ルーズヴェルト大統領の特別教書によつて、條約の權利による國外出兵は侵略にあらず、たゞなされる侵略提案は、獨逸の抑制をば當面の目的とするものであつて、滿洲問題を目的とするものではない、と云ふ。けれどもそれは他日必ず蘇生せしめて、有力にものを言はしむる爲の捨石に違ひあるまい、と私は思ふ。

然し兎に角、米國のこの意嚮は、直ちに又支那に反映してゐる。支那は今次の世界經濟會議に於いては、その會議の性質に鑑みて、銀價の引上げ及び安定並に對支借款等純然たる經濟問題にその主力を傾注し、滿洲問題の如き政治問題は徒らに會議を紛糾せしめる虞があり、且つその實効を收めることは至難であると考へられるから、他

の問題に關聯して副次的に提起されたる場合の外、積極的に政治問題を提案しないことを原則的方針と決定した、と發表した。そうだ、それで充分であるのに、五月十八日ルーズヴェルト大統領と會談を終つた支那世界經濟會議代表財政部長宋子文は、ルーズヴェルト大統領との共同聲明を發表して、「極東における情勢は過去二年間に亘つて世界の平和を攪亂し來つた、二大國の軍隊が敵對し破壊的行動に従事してゐる。吾々は世界の政治的並に經濟的平和を再建せんがため現在懸命になつてゐる。世界のすべての國々の努力を成功せしめんが爲に、極東におけるこれら二大國の敵對行爲が、速に停止されるであらうことも確信する」と、私をして憫笑を買はしめた。だが支那軍は、この共同聲明を面子として、五月二十五日、深く自ら顧みる所あり、無益にして且つ無謀なる抗戰の非を悟り、停戰の交渉を希望する旨を申出で、五月三十一日、塘沽に於ける日支停戰協定となり、長城以南に緩衝地帯を設定するに至つた。吾々はここにも支那の

傀儡性即ち熊襲性を明白に再認識せねばならぬ、と思ふ。
 だのに、この極東の實勢を無視して、若し米國が不注意にも、直接滿洲國問題を提案し、日本を侵略國なりとするか？ そこに堂々たる理論鬭争の陣が張られるのみではなからう。吾等は既に既に重大なる決意を抱いてゐる。愚昧と雖も、嬌慢と雖も、米國たるものはこの拙策には出まい。

米國は提案するであらう。「世界の深刻なる不況を克服するが爲には、先づ各國は金本位に復歸することが肝要である」と。そして日本よ！ お前には現在その復歸能力があるか？ 無い。そうだらう。でも今日の如く圓價が慘落してゐるならば、それは實際に於いて、日本商品のダンピングとならざるを得ない。そこで更に讓歩がやられたとする。そして「では現在以下に圓價を下落せしめない」と云ふ保障を、各國が日本に要求して來たとする。その時にもまた日本よ！ お前はその保障を與へることは出來まい。何故か？ お

前には滿洲國の健全なる發達の爲にする經濟的援助が、その肩にかかつて居るからである。又東洋平和の保障の爲にする有力なる海軍の建造が必要であるからである。然り、そこに尨大なる赤字があり、非常時豫算があるからである。

それ故に日本がその協定なり保障なりを拒否するならば、世界の六十五箇國は、この爲替下落國たる日本に對して、最惠國條款を相一致して中止し、差別關稅を賦課することによつて、間接ではあるが事實上の經濟封鎖を國際的に張らんとするのである。而もその用意は既にされてゐる。米國はソグイェト・ロシヤを形式上承認したし、英國は先づ來る十月十日をもつて滿期となる日印通商條約を、廢棄することを聲明してゐる。今度こそはこの張つた網から日本を脱出せしめてはならない、と彼米國は心の奥で決心してゐる。二三年間この網に引掛けて經濟的にぐたぐたにするか、その中には建造中の一萬噸巡洋艦の七隻が完成するばかりでなく、未起工中の三隻も

完成せしめることが出来る筈である。そこに米國上院海軍委員長トラメル氏の「七億ドル建艦案」がある。米國はその海戰に於いても圓陣戰であるごとく、經濟戰に於いてもまた圓陣戰である。洵にそれは十重二十重である。

では二三年後には必ず吾々は、又米國大艦隊の大演習をば東部太平洋から西部太平洋にかけて見なければならず、その時に又吾々は横濱港頭に羅列される彼等の大艦隊を、歡迎する爲に忙殺されねばならぬであらう。單に忙殺されるのみならず、其時こそ日本が窒息せしめられる時ではなからうか？ 吾々はその意圖を今より明確に彼等に掴むことが出来る。

又、近代醫學は、毒物を人間に注射するに先立つて、兎に注射し、兎に先立つてモルモットに注射する。米國の囑託醫聯盟は、滿洲國を日本に對するモルモットと見る。先づ彼等は滿洲國不承認主義の貫徹を期する爲に、國際諸機關より滿洲國をボイコットし、通貨を否定

し、金融取引を遮断して、經濟封鎖せよと叫び、滿洲國人より郵便の自由旅行の自由をも掠奪せよと叫ぶ。

ぢや日本よ！ お前が若しこの泥濘の深き陷穽を忌避するが爲に、「圓替爲をこれ以下に暴落せしめない」と保障するか？ それが爲には、お前はどうしても滿洲國よりその援助の手を引かねばならず、今より米國に對する「總括的七割」の海軍力を放棄せねばなるまい。さあ、そうなるとそれは大陸の放棄であり、大陸よりの總退却である。そしてその總退却をば息もつかしめず追撃し來るものは、それはソグイエト・ロシヤの赤化戦隊であり、日本共産黨の賣國奴的内應であらう。

これが「危機」でないと云ふか？ 然らば學者よ！ 總ての字引より「危機」といふ文字を抹殺して了へ。眞の非常時はこれからである。然しこの混亂時にあつても、吾々日本人は周章狼狽してはならない。そして悲觀してはならない。吾等の祖先は、死に直面しても自若と

して辭世の和歌をよんだではないか？ そうだ靜かに思考する時、日本の生くる唯一の道は、滿洲國より援助の手を引くことではなくつて、更に積極的に、更に大乗的に、更に超スピード的に、滿洲國を完成せしめる事である。今や滿洲國は日本の心臓である。強くせよ！ その心臓の組織を！

然らば如何にしてその心臓組織を急速に強靱たらしめ得るか？ 私はその對策として、ここに、滿洲國の封建制を策立せんとする者である。

2 滿洲國封建論

滿蒙社會調查論

佛蘭西の一將校が、吾が乃木大將にたづねた、「何人が最後の勝利者になり得るでせうか」と。乃木大將は云はれた、「總ての人々が周章狼狽して了ふよりも、たゞ十五分だけ冷靜であり得る者が、最後の勝利者になり得るでせう」と。況んや今より吾々は周章狼狽してはならない。世界の列強は、見らるるが如く、その深謀と秘策とに今専念し

てゐるではないか？ 吾々もまた嵐の前の静けさを以つて、世界最後の勝利者たるが爲に、その思索と實行とに専念せねばならない。

では、先づ冷静に思索して往くことにしよう。

一體、日本人は自己の心を持つて、人を律しようとする。何故か？ それは日本民族が長い間「島國生活」をやつて來てゐるし、又その生産生活に於いては、「農耕生活」を主として來たからであらう。農耕生産はその本質として土地に加工する、即ち土地を資本化して來る。而もその資本化された土地は不動的であるから、農耕人はその土地に愛着する。恐らくは日本人程土地と云ふものに、心からなる愛着を感ずる者は、世界の他の部分にはなからう。日本人は自分の土地といふものを持つことに焦心してゐる。だからそこに農耕地の價格騰貴が起り、従つて小作問題が発生する。よし又彼等が農耕人からその足を洗つて、商工人となり、サラリーマンとなり、都會人となつても、彼等はその利廻を無視して、「自分の土地」と云ふものを確に持ちた

がつて居る。そしてそれを持つことに誇りと安心と満足と慰安とを發見してゐる。棟割長屋にも一坪か半坪の庭がある。彼等はその庭で朝顔を咲かせ、コスモスを蒔く。庭が悉無であるか、彼等は家根の上の物干場で植木鉢をばならべる。又アパート、下宿に住むことを餘儀なくせしめられてゐる人々は、小物の一鉢をその机に置くことによつて、農耕人の心に土地の追憶を與へることを忘れない。然し狩獵、牧畜の生活をば、近世の初期に至るまでつゞけて來た西洋人には、必然土地に對する愛着は左程深いものではない。彼等には掠奪的な「切花」はあるが、培養加護的な「盆栽」を見ない。

斯くして日本人が土地に愛着し、即ち定住して來ると、その近隣に亘つて血縁關係をば次第に濃厚にして來た。そればかりではなく、島國の面積狭小と、その移動に制限が附せられてゐるといふことによつて、人種は混血し、風俗慣習は相互に同一化されて、全く同一民族と化成して來たのであつた。それ故に日本人は、相互にその心境を

同じくしてゐた。従つて甲の心を持つて乙の心に移し、乙の心を持つて丙の心として、その間大なる過誤のない二千數百年を經過して來たのであつた。そして私は、ここに自らの心を以つて他人を律しようとする日本民族の心理的特性が、根據づけられてゐるのだと思ふ。

加之、日本人は昔より燦然たる外來文明の次ぎから次への渡來によつて、その模倣心を高調せしめられて來てゐる。彼の支那文明をば一意模倣して、漸くそれに對して反模倣が起りかけて來た時に、印度文明がやつて來た。印度文明が消化されて、日本のものになりかけて來た時に、西洋の物質文明がやつて來た。そしてこの物質文明は、一層日本人を思索して行くよりも、手取早く模倣することに習慣づけて來た。従つて又日本人は、他人をも思索することなしに、一意急進的に模倣せしめようとする。

そこで、今、日本人が民族的に異なる地方の政治に當るとするか？



學理地。ふ云は紙米と？か日落か天昇は陽太のあと「りな日旭の本日は日落の國米」ふ云てへ答は

日本人は自分の制度をそのままその民族の上に移植して行かうとする。そしてその民族をして急進的に一意自己が今日までなし來

りしが如く、懷疑することなしに、今度は自己を模倣せしめ、一日も早く自己の文化的水平線にまで——よしその外的でさへも——高めようとする。

例へば日本人は、臺灣の統治に際して、如何に熱心に、一日も早くその文化を、日本内地と同等にするかに狂奔して來たか？そしてどんなに多大の犠牲を精神的にまたより多く財政的に拂つて來たか？而もその場合、嘗つて臺灣人の風俗慣習

を考慮の中に入れてたか？ 又彼等大衆の眞の渴望に敬意を拂つたであらうか？ 日本人はその心では——即ち主観では親切であるにも拘らず、客観的には、否、相手方の主観にとつては、時として甚しき迫害だと考へられて、誤解の多くが介在せしめられたことがあつたではなかつたか？ 何故か？ それは診断することなしに、投薬する「買藥政治」であつたからである。政治をなすにその対象を知ることば求めずして、自己よがり、にその政治の基調を置いて來たからである。

私は云ふ、先づ診断をやれ、そして後に政治をせよと。そしてその診断を、私は「社會調査」と云ふのである。

日本は嘗つて朝鮮を併合した。その際に於いても、先づなされる可きものは、朝鮮の社會調査ではなかつたか？ 然るに例によつて日本の官僚政治は、餘り社會調査をなすことなしに買藥政治をやつた。故に多大の努力が拂はれたにも拘らず、大なる誤解と誤解に伴ふ禍

根とが遺され來つたと云ふことは將來必ず政治史家によつて筆にされ來るであらう。然し論者の或る者は、私のこの不調査説に反對する。そして朝鮮に於いても幾多の調査がなされたと云ふに違ひない。そうだ、私もそこに調査の或る者がなされたことを認めるに吝ではない。然しなされる可き肝要なる調査が閑却されてゐたり、調査は單に調査の爲の調査であつて、實際政治にまでアウフヘーベンされてはゐないぢやないか？

社會調査には、第一は「人口の調査」があり、人口の調査には、人口構成の調査があり、人口多少の調査、即ち人口の絶對數の調査と人口の相對數の調査、例へば密度及び分布の調査がある。又その人口が如何に移動して行くかの、人口移動の調査がある。そしてそれ等は人口統計によつて、多くはなされてゐる。次に吾々は「人種の調査」を必要とする。その體形、その體質、そして性格の調査がされねばならない。然し多くの場合、人口の調査が容易である所からそれに偏傾され勝

得る爲の政治政策は、自ら策立されて來る譯である。

然るに朝鮮統治の第一歩に於いて、當局者は、一よし調査研究がされたとしても、形式に流れ、末葉に走つて、朝鮮社會の政治的渴望を洞察し得なかつたではなかつたか？ ではその渴望とは何であつたか、曰く、それは「仁政」であつた。然らば當局者は、仁政をしかずして「虐政」をしいたか？ 否、當局者は「仁政」をしいたに違ひない。たゞそれは日本人の仁政であつて、朝鮮人の仁政ではなかつた。再言すれば朝鮮人の仁政と呼ぶ所の内容と、日本人が仁政なりとする所の内容との間に差異があつた。當局者は、朝鮮社會が仁政なりとなす内容の調査研究をば怠つて、自己が以つて仁政の内容となす所に依つて、朝鮮社會を律しようとした。當局者は、「二視同仁」を以つて、仁政の内容とした。だから例へば、日本内地に於いて華族が厚遇せらるゝ如く、朝鮮在來の、彼等の貴族をも華族に列して厚遇した。然るに朝鮮人の仁政なりと信ずる所は、先づ「賞罰を明にすること」であつた。

それ故に彼等朝鮮人は皆等しく心に期してゐた。聞く所によると日本の天皇陛下は仁政をしき給ふそである。して見ると、長年月に亘つて苛政を行ひ、祖國朝鮮をして疲憊その極に達せしめたる貴族等は、必ず日本の天皇陛下によつて嚴罰に處せられるであらうし、又その間虐げられてゐた民衆の味方となり、盾となつてゐた民間の名門徳望家は賞與されて、代つて貴族に列せられるであらうと。

然るにその期待は、當局の一視同仁によつて、而もその一視同仁を佛者の所謂「惡平等」なりと解することによつて、依然として舊き貴族は新しき華族となることによつて榮え、民間の名門徳望家は又依然として草深く埋れて、その舊態をば改め得なかつた。そこに甚しき民衆の失望が作興されずにはゐなかつた。そして新政は仁政にあらずして寧ろ惡政の類なりと認識され、誤解されるに至つた。この誤解が併合政治の第一印象であり、第一印象は強く先入觀念となることによつて、前述の如く政治的禍根を將來に遺し、その誤解をば繰

返さしめたのであつた。

殊に人事行政の失當は、政策の失策よりもより明白に、その當初に於いて、既に大なる失望を一般民衆に投與するに役立つものであることは、田中内閣の人事行政に對して、吾々も痛感した所である。

朝鮮の學生に聞くと、彼等の或る者は、「朝鮮にある日本人と内地にある日本人とは、その人種を異にしてゐるのだ」と信じてゐた。又或る者は、日本にやつて來て、内地の日本人に接し、歸國して日本人の道徳性を説くと、郷黨は彼を日本に買収されたりと考へるのであつた。而もまた下級の朝鮮人官吏は、上級日本人官吏の朝鮮語に通ぜざるを乗ずべしとなし、日本人官吏の名によつて不正をなし、搾取を敢てなし、又敢てなすが如き、既にその郷黨の間に指彈され居るが如き者をば、誤つて採用し且つ重用することがあるか、その政治に對する不信と失望とは、一層深刻化されねばならぬ。それ故に吾々は、この社會調査に基礎づけられてゐない政策と政治とを、極度に危懼しなけ

ればならない。

近時私は、「立憲國民である日本人であるかぎり、滿洲に理想の國家を建てんことを希ふなら、そこにも立憲政治の行はれんことを慥にし相なものである。昔、米國に移住した英人はさうした。それを本國が妨げたために獨立した、それ程彼等は立憲政治に執着してゐたのである」と滿洲國にも、日本と同等に立憲政治をしけよ、と論ずる識者のあるのに驚愕し、「王道政治の思想はといへば、字の通り王者の道である、即ち王者の政である、王者とは先王のことである、先王とは三皇五帝のことである、いはゆる堯舜の政治である、堯舜の政治にはいゝ所がある、一概に舊政治として排斥してはよくないが、それは今日の立憲政治ではない、その立憲政治でないものが、主義に於いて、原理に於いて、立憲政治と反するものが、一部日本國民の理想として、滿洲國に唱へられつゝある」と王道政治を、立憲政治に反するものなりと斷ずるの愚論を聞く。然し王道政治とは、その政治の内容に關する

ものであつて、「善政」を意味して居り、立憲政治はその政治の形式に關するものであつて、善政をなす手續の一つの方法ではないか？ 現代が有する王道政治に對する渴望は、立憲政治が徒らにその形式に流れて、政治の實績をあげ得ないばかりか、時として惡政の甚しきものに墮することのあるのに對する、實質的善政の要望に外ならないのである。時として兩者は矛盾し、時として兩者は一致する。だがその矛盾は王道政治の非にあらずして、立憲政治の非であることを、論者は理解せねばならない。

私は明言する。滿洲を日本と同一視せんとする、この藪醫者式仁政を、斷乎として排撃することを。彼等は似而非なる文化主義者であり、非人道主義者であり、空想家であり、或は詩人である。だから先づなさるべきものは、滿洲國の社會調査である。そしてその診斷によつて、科學的なる仁政がなさるべきである。

けれども論者の或る者は、見よ！ 南洋に於いて示されてゐる日

本の統治成績を！ と反對するであらう。そして日本が占領する前年には、僅に百二十萬マール、即ち六十萬圓であつた歳出入額は、大正十五年度には千百萬圓となり、昭和六年には千三百萬圓となつた。又獨領時代には僅に一つであつた學校が、今日では九つの小學校と二十三の公學校とがあり、二千名の日本兒童と三千名の島民兒童とを教育して居ると誇るであらう。然しそれはその面積に於いても、人口に於いても、滿洲國の比ではない。論者はそこに思を及す必要があり、又、衛生に特に留意しながらも、年々土人の人口が減少しつつある、殊に文化の最も進めるヤップ島の如きは、如何にしてそれが對策を講ぜんとするかに苦心されつつあると報告されてゐること、
「西班牙時代に於いては、大虐殺が屢々敢行されたにも拘らず、人口は増加を來してゐた」と云ふこと、を對比して、それは三省する必要があるではないか？

社會學者は云ふ、急激に刺戟的なる文化を未開の社會に注入する

か、その社會は必ずその刺戟の強烈さに堪え兼ねて、人口減衰を來すと。例へばニュー・ジラランドは、英國の強烈なる文化注入政策によつて全島の土人人口をば減衰せしめ、遂には全滅せしめて了つたではないか？ それ故にそこにまた南洋群島の社會進歩の程度を調査研究し、その政策、その政治に適用しなかつたと云ふ怠慢さが、暴露されるではないか？

斯く思考して來ると、吾々が今、滿洲國を一日も早く東洋平和、進んでは世界平和の爲に、理想の國家とし、そして又日本が國家としての責任と負擔とを充分に且つ一日も早く果さんが爲には、嘗つてブルードンの云つたが如く、それは決して發明ではなくつて發見である。換言すれば、自己の貧弱なる頭の中での一寸した思ひつきではなくつて、社會の進動する確乎たる法則を先づ發見して、それに則して國家社會の改造を企圖しなければならぬ。

支那人幾千年間の「銀」に對する傳統的愛着心を考慮することなし

に、金本位制を云々し、金銀兩本位制を云々するが如き、輕舉的なる發明をば、吾々は悉くこの際滿洲國から驅逐して了はねばならない。滿洲國は斷乎として再調査されねばならない。そしてその政治は再建されねばならない。然れどもその再建は、焦眉の急に屬してゐる。借すに長き年月を以つてすることは不可能である。而も幸に社會科學の研究法は、歸納的研究法である社會調査に對して、演繹的研究法及び類推的研究法のあることを教へる。

で私は、更に演繹的研究法及び類推的研究法によつて、將來、近き將來歸納的研究法による社會調査の結果と、テストし合ふ時に於いて大過なき結果を、發見することを、今、努力せねばならない。

社會過程同一論

歴史哲學は吾々に教へる。人間は、その種族又はその皮膚の色、區別に關係なく、悉く搖籃から墳墓に入るまでの間に、同一の發達相

をば通過するものである。成程、人間はその年齢に依り、又は種族、氣候、及び生存状態に従つて、狭い範囲内では異つては居るが、然し成長、成熟、及び老衰の同じ變化期を経験することは不變である。それと同じく、人間社會はまた皆同じやうな社會的、宗教的、經濟的、及び政治的形式、そしてそれに應じた諸思想を次ぎ次ぎにと通過するものであると。

この歴史的發達の大法則を會得した第一人者は、「歴史哲學の父」と呼ばれる伊太利のジ・ビー・グイコであつた。彼はその著「新科學原理」の中で、「理想的の、永遠の歴史」に就いて、次の如く述べてゐる。曰く、「あらゆる國民の歴史は、この理想的な、永遠な歴史に従つて、代々發展して來たものである。如何なる野蠻な、犖猛な、又は未開な状態から出發しても、人間は必ず牧畜に向つて進歩するものである」と。そして若し吾々が未開状態から文明状態までの一民族の歴史を探知し得たならば、吾々はそれで、地球上に棲息した各民族の、代表的な歴史を

持つた事になる筈である、と主張し、且つその歴史を改造する事は、吾々の手には到底及ばない。と云ふのは、一民族がその進化の経路中に、一段づゝ上つて來た階段を、また下ると云ふことは、吾々に取つては不可能だからである、と説くのである。

そうだ、同一の發達相をば次ぎ次ぎにと、一つの過程と雖も飛越したり、再び繰返したりすることなく、秩序整然として、人間の意志から全く獨立して、一定必然の過程を経過しなければならぬものであるらしい。こゝに又吾々は、この「過程同一論」をば、生理學的及び心理學的研究より類推せしめることが出来る。

彼の獨逸の生物哲學者エルンスト・ヘッケルは、人間が人間として生れ出る爲には、人類が生物進化の階梯に昇るその最初の形態たるアミーバーから、今日まで既に經過し來つた所の進化の諸階段を、順次に再び經過することによつてのみ、人間の形體を具へ得るに至るものである、と云ふことをば發見し、「個體發現の爲には、種族發生をば

經過する」と述べたのであつた。それ故に今受精卵が子宮の中で、太陰月の十箇月、即ち二百八十日間を生活するとするならば、この二百八十日間で最初のアミバーより最初の人間、—社會學者に云はせるならば原人、—にまで進化して來た千數百萬年の過程を、順次に經過するのである。それは進化し來りたる種族相を、—例へば或る瞬間には蚯蚓となり、或は蛭となり、又は蛞蝓となり、蝸牛となり、鯨となり、蛇となり、蝶蠟となり、蟾蜍となり、土龍となり、龜となり、鳥となり、豚となり、猿となり、百段返し千段返しの早變りを演ずることであらうが、その一つの相たりとも、—節約することはしない。又出來得ない。恰もそれは東京より下關へ汽車で行く場合に、普通列車に乗りし所を急行に乗り、或は特急に乗るが如きものであつて、よしその時間を如何に短縮し得たとしても、その沿線の各驛を必ず通過しなければならぬ、と同理である。

更に私は、この非飛躍的なる進化の過程を、心理現象に求めて見よ

う。バオラ・ロンブローゾ嬢の有名なる子供の心理の發達過程と野蠻人の心理との比較研究は、私に興味ある事實を語る。嬢は、その著「児童心理學」で言ふ。「子供は實に人類進歩の總ての階段をば、小さく壓搾し綜合したる縮圖である」と。又その序文に於いて父のロンブローゾ教授は、「子供は奇妙なる世界である。そしてその心理的發展に於いて、その情緒に於いて、原始人を彼等の中に瞥見することが出来る」と附加してゐるのである。それ故に文明人の子供は成人となるまでの中に、その心的生活に於いて、原始的野蠻人のそれより、未開人のそれを經過して、文明人にまで到達するのである。だからヘッケルの語調を模して云ふならば、「文明人の發現は、野蠻未開人の發生を經過する」と云ふことが出来る。普通に野蠻時代を三期に分け、その古代と中代とは火の發明によつて境され、中代と近代とは弓矢の發明によつて區分され、そして又野蠻時代と未開時代とは、土器の發明によつて境されてゐるのである。又未開時代も夫々三分さ

れて、古代と中代とは植物の耕作、動物の家畜化により、中代と近代とは、鐵器の使用によつて區別されてゐるのである。

今、嬰兒より成年に至るまでの時期を五期に分け、三歳時代、七歳時代、十歳時代、十二歳時代、十八歳時代となし、それを夫々野蠻未開の時代に對應せしめるならば、三歳時代は草根を食物としてゐた野蠻第一期の「草根時代」に當り、七歳時代は野蠻第二期及び第三期の「狩獵時代」に當り、十歳時代は未開第一期の「土器時代」に當り、十二歳時代は未開第二期の「農業時代」をなし、十八歳時代となるや未開第三期、即ち文明時代の第一期に接續する「商業時代」に該當して來るのである。何故ならば吾々が子供等のなし來る遊戯の種類を見る時に、それが肯定されるであらう。三歳時代の子供は咬み且つ甜めることによつて遊び、七歳時代に於いては昆蟲を取り、蛇を殺し、犬を追ひ、隠れん坊をなし、十歳時代には、土をこねて細工をなし、小屋をば作り、十二歳時代となつては、箱庭を造り、草花を蒔き、十八歳時代となるや、船を漕ぎ、

交換をなし、勝負を争ふことによつても、それは明であらうと主張されるのである。そして又遊戯の學說に於けるグロオス説及び加速度説は、この事實にその論據を發見してゐるものである。

斯く考究して來ると現代人は、生物學的にもまた心理學的にも、アミパーより一聯して、切り離すことの出來ない進化過程の末に位してゐるものであることが、理解されるであらう。そこで進んで私は又その關係をば、人間思想の發展階段に於いて、跡附けて見る。

コンドルセー、サンシモン及びオーギュスト・コントは、人間の思想が三段開展をなすものであると考へ、神學的宗教的より形而上學的哲學的を経て實證的科學的に進むと論じ、カント及びヘーゲルは、それを又獨斷、懷疑、批判とし、グンプロウキツは、有神論的、合理的及び自然論的となしてゐる。そして人間思想の發展が未だ原始的である時代、又は文明社會にあつても人々が子供である時には、その思想は獨斷的となり、宗教的である。故に原始人の生活は悉く宗教的色調

によつて彩られ、在來の權威をば獨斷的に信仰し、僧侶を信じ、教典を信じ、そしてそれ等をば少しも疑はうとはしない。又子供の生活は、その父母を信じ、その先生を信じ、書籍を信じ、雜誌印刷物を信じ、悉くそれ等を模倣の對象にしようとなつてゐる。然るに人類が中世時代に入り來るか、又は人々が青年時代となるかすると、悉く書を信ずれば、書無きに如すと喝破し、在來獨斷的に模倣的に信奉し來つた權威をば疑ひ、その極哲學者ヒュームの如く、自己の存在までも疑り出すのであつて、其思想は明に懷疑的であり、哲學的となるのである。然るに人類が近代に進むか、又は人々が成年期に到達するかすると、懷疑的哲學的思想は、批判的なる科學的思想によつて置換され、自然のあるがまゝなる現象をば觀察し、それが従つて動く所の理法を把握し、それによつて自然を統制し、驅使しようとして來るものである。そして私は、この思想三段開展の法則を修正して、(1)無識的本能的、(2)意識的模倣的、(3)自覺的懷疑的、(4)思辨的批判的、(5)先見的理

想的の五段開展とするのである。

今、文明人の心理發現が、野蠻未開人の心理發生を經過するものとするならば、更に一步その進化過程を溯行して、その種族發生をも經過し、或は經過したる心理的追懷を、一私の所謂「思想進化共在説」よりするも、一有してゐて、恰も嬰兒が、本能的にその意義を考へることなく、無意識的に反射運動的にその指を乳頭の如くしやぶつてゐるが様に、その最初の心理活動は、寧ろ無識的本能的より開始されねばならぬ筈である。だから又レスシャフトは、生れたばかりの嬰兒時代を(1)混沌期となし。それから言葉を話し出すまでの時代を(2)反射期。學校に行くまでの時代を(3)具體的模倣期。二十歳までの時代を(4)抽象的模倣期。成年の時代を(5)批判創造期となし、パールヴァレンチンは、生れて四五ヶ月の間を(1)本能期。六七歳までを(2)模倣期。それ以上をば(3)環境に應化する、即ち應化期となしてゐるのである。

然るに若し人々が進んで意識し出して来るか、彼等はそれを模倣し出して来る。そして自己を發見して自覺の域に達するか、今迄無



— 索思の痴白 —

自覺的に信奉してゐた權威に對して、疑惑を懷き出して来るものである。又更に人々が進んで思辨的となり、比較研究をなして来るか、彼等の思想は批判的となり、そしてその批判的研究によつて、恒久的

なる理法をば發見して来るか、人々はそれによつて先見的となり、そして先見的となるか、彼等が抱いてゐる所の理想に、如何にして到達し得るやの方策を明にし得るに至るのである。

では、若しこの一定の必然的に經過せねばならぬ段階に於いて、その次ぎの一つ又は二つの段階を、飛越すことが可能であるか？ 若し可能であつたとしたならば、その飛越しが行はれた場合に、如何なる結果が招來されて来るか？ が、こゝに問題とならざるを得ない。

私はその飛越しは不可能であると云ふ。そして無理にその飛越しが敢行されたとするか、それは必ず再び後退することを餘儀なくせねばならない。今、私は、吾々が最も痛感せしめられてゐる日本現代の思想界で、それを例證しようと思ふ。

日本人は、宗教的であつた舊幕時代から一足飛びに、科學的である明治時代に入込んで來た。だから明にその間に介在する哲學的懷疑的時代を飛越してゐる。そして國民として、民族として哲學する

時代を失つて了つてゐる様に考へられる。だが靜に觀察すると、日本民族は、未だ眞の科學時代には入込んで來てゐるとは云ひ得ない。現代の日本人の多くは、たゞ神の偶像を信仰する代りに科學といふ偶像を信仰してゐるに過ぎない。して見ると未だ宗教的模倣的時代を脱出し得てゐるとは、見らるべきではない。見よ、日本人は先づ學生として幼稚園から小學、中學、高等學校、大學、高文、就職と、その一生の大半を殆ど試験の爲の諳記、即ち盲信と模倣とで追捲られてゐるではないか？ そうだ、確にこの科學の信仰、殊に社會科學を信仰して了ふといふ所に、現代日本の思想的變態があり、その癌症からすべての思想問題が発生して來るのである。それ故に吾々日本民族もこの哲學時代を必ず經過することなしに、眞の科學時代に入込むことが出來ない。若し既に飛越し得たと思考してゐる者は、又後戻りを行はねばならない。そして宗教的獨斷性を懷疑のメスによつて、悉く解剖し清算して、自ら思索することによつて、自らの精神的獨立

性を確保することなしには、眞に科學時代に入込むことは不可能である。即ち過程に於ける段階の飛越しは不可能であり、不可能であるばかりでなく、この法則を冒瀆するといふことは、害あつて益なく、それが爲に多くの社會問題を簇出せしめて來るのである。更に又吾々は章を改めて、この法則が經濟的及び政治的過程に於いても、同様にその發展過程の段階をば、飛越し得るものではないと云ふことを、明にしようと思ふ。

經濟的的政治的過程の不可排去性

有名なる一句であるが、マルクスは、その著「經濟學批判」の序文の中で云ふ、「人類は彼等の生活の社會的生産に於いて、一定の必然的の彼等の意志より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に、適應する所の生産關係に入込むものである。そしてこれ等生産關係の總和は、社會の經濟的構造を成すものであり、……又

その社會生産が、その制度内に於いて、發展を爲し遂げ得る餘地の全くなくなつた後でなければ、決してその制度は顛覆し去るものではない。又新になるより高き程度の生産關係は、そのものの物質的存在條件が、古き社會の母胎内に孕まれる以前に於いて、決して發生し來るものではない。それは、人間が、常に自ら解決し得る問題のみを問題とするものであるからである。何故ならば、凡て問題となるものは、一層正確に之を観察するならば、その解決に必要な物質的條件が已に存在して居るか、又は少くともその成立の過程にある場合にのみ初めて發生するものであるからである」と。又、マルクスは、その著「資本論」の第一卷の序文の中に、「一國民は他から學ばねばならぬし、また學ぶことも可能である。加之、或る社會が、その推移の自然法則に従つて、その發展の足跡を辿るやうになると、……その社會は、自然にその發展階段を飛躍し得るものではないし、また排去することも出來ない。たゞ社會は、その新しき生みの悩みを短かくするか、緩

和することが出来るだけである」と、その社會、殊に經濟的過程に於いて、飛越し或はその排去が、不可能であることをば力説してゐるのである。

そして私は、又マルクスの不排去説の信條を、忠實に繼承してゐる者として、ロシアのブレハーノフとドイツのカウツキーとを考へる。先づブレハーノフはメンシエヴキキの統領として、ボルシエヴキキの統領であつたレーニンと、火の出る様な理論闘争を繰返したのであつた。そしてその論争は、この排去可能と不可能とを中心論點としてゐた。ブレハーノフは、この不排去説に立脚して云ふ。ロシアは未だ專制封建時代を出てゐないし、その資本主義は未だ充分に發達してゐない。故にその状態は、大に西歐羅巴諸國と異なるものがある。第一に工場労働者の數が非常に少くない。だから吾々マルキストは、今暫くロシアの自由主義或は民主主義の有産者階級と協力妥協して、專制封建制から脱却し、高度の資本主義社會の洗禮を受

けねばならない。して又この高度の資本主義社會を經過することなしには、ロシアは、どうしても社會主義社會に入込むことは不可能であるからである。従つて今、自由主義或は民主主義の有産階級の同情と協力とを、排斥し去ると云ふことは、罪惡であるのみならず、それは甚しく危険であると力説し、議會主義を採らんとするのである。然るにレーニンは、ブレハーフを日和見主義者であると非難した。成程、ロシアには工場労働者の数は少くない。然し全く無産にして貧窮なる農民の大衆があるではないか。故に若しこの労働者と農民とを結合することにさへ成功したなら、その大衆の力によつて飛躍的に、ロシアの現状から、即ち封建的或は個人資本主義的時代から、社會主義の時代に一足飛びに飛込むことが出来る。そしてその武器としてプロレタリアの獨裁が必要なのである。彼ブレハーフは、ロシアに於いて、光輝あるマルキシズムの戦士であつたが、今や墮落して似而非なるマルキストとなつたと攻撃し、彼が一九一

七年の十一月革命に成功するや、一舉にして共產主義を實行して、着々その終局の目的に向つて進行したのであつた。そして又進行しつゝあつたかの如くにも觀察されてゐた。だが然しその社會の裏面に於いては、ロシアの經濟的資力が全く蕩盡され、レーニンは主觀的には共產主義の舟を漕ぎ進めてゐるかの如く考へてゐたのに、客觀的には經濟資力の廢滅といふアンダーカレントによつて流されつゝあつたのであつた。彼等は遂に産業能力の痲痺によつて、それをば自覺せねばならなくなつて來た。そして彼等は、「吾々の經濟は消費者の爲に存するものであつて、經濟の爲に消費者が存在するのではない」と叫び出し、「共產主義者と雖も、彼等が哲學者であり得る前には食はねばならぬ」と悲鳴をあげ、斯くして觀念の遊戯は、經濟生活の實際的暗礁に乗上げ、生きんが爲に、その方向を一轉し、所謂新經濟政策へと轉向して來たのであつた。

ロシアの新經濟政策は、それは明に資本主義への退歩である、と一

般に云はれてゐる。だから私は、先づレーニンのそれに對する言譯から聞くことにしよう。レーニンは、新經濟政策、即ちネブへの後戻りの必然性を説明して、人類經濟生活の發展過程は、五つの階段に分けることが出来る。そしてそれは、

一、父權時代(それは大部分原始的なる百姓生産の時代である)
二、小商品生産の時代(この時代には穀物を賣る百姓の多くが存在する時代である)

三、個人資本主義の時代

四、國家資本主義の時代

五、社會主義の時代

である。

然るにロシア社會は、宏大なる版圖を有してゐて、社會經濟層の、これ等總ての、各種多様な形態をば、その内に包含し、その大體に於いて、未だ第二の時代及び第三の時代に彷徨してゐる。そして若しそ

れを正確にいふならば、それは小ブルジョアの資本主義の時代である。それ故にロシア社會は、先づその第四の時代即ち國家資本主義の時代を経過することなしに、直ちに第五の時代即ち社會主義の時代に入込むことは、彼等の努力の如何なるものを以つてしても、到底不可能なる独自の過程に屬するものである。だから共產ロシアの失敗は、この必然的過程を消去して、一氣に社會主義時代に實現せんとした誤謬に基くものでなければならぬ。而も社會主義は、國家資本主義の專賣よりその一步を踏出すことに外ならず、國家專賣主義的資本主義は、社會主義に對して最も完全なる物質的條件の準備に外ならない。故に吾々はこの物質的條件の成立を、現在ロシア社會内に横溢してゐる小ブルジョアの資本主義と戦ひ、その中世主義をば亡すことによつて、確保せねばならない。今、資本主義を社會主義に比するならば、それは罪惡である。然し彼の中世主義に比するならば、それは幸福である。だから吾々は一時國家資本主義即ち

新經濟政策へと讓步せねばならない、とその讓步をば理論づけた。

又レーニンは、一九二一年十二月の共産黨大會で、新經濟政策は必要となつて來た。何故ならば、勞働者と農民との間にある政治的軍事的同盟は、まだ經濟的同盟によつて跡づけられてゐない。敵軍の侵略によつて大規模に荒廢したロシアの産業は、農民に必要な物品をば供給することが出來なくなつてゐる。……繁榮せる大規模なる産業なしでは、必要な速さを以つて總ての農民の要求を充す様なそんなやり方で、充分それ自らを組織すること、即ち勞働者と農民との間に於ける有力なる同盟の漸進的發展は、たゞ貨幣制度によつてのみ、そして又勞農國家の指導と管理との下に農業及び製造工業を、次第に進歩せしむることによつてのみ、請合ふことが出来る。……現在の事態に於いては、賣買が農民と勞働者即ち農業と製造工業との間にある唯一の可能なる連接である。……そして吾々共産主義者にとつては、それは非常に氣に食はぬ發見である。……けれども危険

は切迫してゐる。そして革命の先鋒は餘りに進みすぎて、農民大衆との聯絡は切離されるであらう。……だから總ての事件の心髓は、農産物に租税をかけることによつて、在來の強制的徵發に置換することである。そしてそれは、實に吾々經濟政策の中樞的特色である」と、新經濟政策に於ける農業租税の意義を解明し、今一度確固たる貨幣制度を樹立して來たのであつた。

して見ると、ボルシエヴキキはその實際政治に於いて、遺憾なくメシエヴキキを壓倒し、天下の權を掌握して來た。けれどもその政治理論に於いては、明にレーニンの敗北であり、そしてプレハーノフの勝利であつた、と評されねばならない。レーニンは勞農共産革命の實驗に徴して、自己の、即ち排去可能説が誤謬であつて、プレハーノフの排去不可能説が妥當である、といふことを發見して、後戻りをば聲明したのであつた。

カウツキのレーニンに對する反對も、この排去不可能説に立脚



は—シラクモデ・嵐の裁獨は界世
と「?も前おトルエヴズール」ぶ叫

し、主として民主々義
對プロレタリア獨裁
主義の論争であつた、
と見るべきであらう。
却說、社會はその經
濟的階段に於いて、人
間の意志から獨立し
た一定必然の過程を
踏んで、その中の一つ
の階段と雖も、飛越し
得ないとするならば、
その基礎建築に適應
して構築さるゝ上層
建築、殊にその政治的

組織に於いても、また必然その飛越しは不可能であり、その發展階段の排去不可能が、唯物史觀的に主張されねばならぬ。
又、既に論述して置いたが如く、思想的發展階段に於いても、その階段を排除し去ることは全く不可能であり、敢てそこに飛越しを行つたとしても、それに次いで來るものは、必ず後戻りでなければならぬ。いとするか？ この思想的發展階段の、神學的、宗教的、哲學的、形而上學的、科學的、實理的の三階段に適應する政治的發展階段は、サンシモン及びコムトによれば、戰爭的、武力的、法律的、革命的、産業的、平和的の三階段の組織である。だから政治的階段が思想的階段に適應するものなりとする、所謂唯心史觀よりするも、また人間はその政治的發展階段に於いて飛越しを敢行し、その排去を企圖することは不可能であり、結局それは政治の進歩にとつて、有害にして無益でなければならぬ。
私は思ふ。農業的經濟構造に神學的、宗教的思想體系が基礎づけ

られ、神學的宗教的思想體系に戰爭的武力的政治組織が適應し、商業的經濟構造に哲學的形而上學的思想體系が基礎づけられ、哲學的形而上學的思想體系に法律的革命的組織が適應し、又、工業的經濟構造に科學的實理的思想體系が基礎づけられ、科學的實理的思想體系に産業的平和的政治組織が適應するのであると。

それ故にその社會が農業國である場合には、その政治組織は、戰爭的武力的即ち封建的でなければならぬ。そして社會は、その封建的政治階段を經過することなしに、近代文明社會の政治階段、即ち立憲的政治に入込むことは不可能であると云ふことは、既に吾々が繰返して立證に努め來りたる「社會過程の同一不排去性」によつて、こゝに確言することが出来る。

進んで吾々が、この社會的發展過程を對比し、更に政治的發展の階段を分觀するか、次表の如くすることが出来る。そしてレーニンの所謂小商品生産の時代が封建時代に當り、個人資本主義の時代が

農業時代	交換經濟	神學的宗教的思想	戰爭的武力的組織	階級主義	干涉主義	保守主義	專制主義	英雄主義	封建時代
商業時代	貨幣經濟	哲學的形而上學的思想	法律的革命的組織	平等主義	放任主義	急進主義	自由主義	民衆主義	解放時代
工業時代	信用經濟	科學的實理的思想	産業的平和的組織	秩序主義	政策主義	進歩主義	立憲主義	組織主義	集權時代

解放時代に當り、國家資本主義の時代が、集權時代に當ると見ることが出来る。

先づ社會をして、封建時代を滿喫せしめよ！ 然らば解放時代は必然的に至り、飽和するに解放時代を以つてするか、そこに集權時代への轉化が、當然行はれねばならぬからである。従つて今、滿洲國がその社會的經濟構造に於いて、未だ農業時代を説出し得ないであるか、そして又必然封建制度を滿喫し得ないであるならば、滿洲國に於いて立憲政治が企圖されるよりも、寧ろ封建政治が企圖されねばならぬ政治科學の合理性を、私は明確に而も力強く主張することが出来る。

滿蒙社會の封建性

近代人のイデオロギーよりするか、勿論封建制度は呪ふ可きである。それ故に今、滿洲國に封建制度の確立を暫時でも企圖せよ、と主張するならば、時代錯誤も甚しき愚論として嘲笑されるであらう。然し嘲笑者をして、その嘲笑を恣にせしめよ！ 彼等の嘲笑は、他日自らへの嘲笑と轉向せしめられずには、必ずるない。

先づ日本人よ！ 滿蒙の天地を正視せよ！

日本人の頭の中には「滿蒙」と「滿鐵」とが混同され、従つて同一視され勝ちである。だが南滿洲鐵道とは、滿洲國內の鐵道の一部分であり、日本の一つ會社が所有するものに過ぎない。

滿洲國は、その總面積に於いて、百十九萬二千三百九十四方籽(滿鐵の調査による)或は百七十七萬六千六百十三方籽(北東年鑑による)と數へられ、日本の關東州及び滿鐵附屬地帯の總面積は、僅に三千七百

省名	滿鐵調査	北東年鑑
奉天省	185,206	382,894
吉林省	267,753	437,496
黑龍江省	582,609	760,475
熱河省	156,826	195,748
合計	1,192,394	1,776,613
關東洲	3,462	
滿鐵附屬地帯	278	
合計	3,740	

四十方籽、即ち滿洲國總面積の三厘一毛三絲強(又は二厘一毛一絲強)にさへ當つてゐない。今、滿洲國の面積を明確に頭の中に思ひ浮べる爲に云ふならば、滿洲國は、佛蘭西本國及び獨逸の面積を合せたるものに等しい。そしてその大部分は林

森地であり、草原であり、又農耕地である。それ故に滿洲國は、明に未だ農業國である。否、牧畜國より農業國に入込んで來て間もない社會である。例へば滿洲國は輸出超過國であつて、最近までは年一億乃至一億五千萬圓の輸出超過を示し、一昨年は二億五千萬圓の輸出超過を示

してゐるが、その九十五パーセントは農産物であり、その中でも大部分は大豆である。そして工業の主なるものとして見るべきは、撫順炭鑛、鞍山製鐵所、沙河口鐵道工場、大連機械製作所及び滿鐵傍系の會

社で經營してゐるもの以外には、殆ど大規模のものはない。して見れば、滿洲社會の工業性は、日本社會の工業性の延長に過ぎなくつて、

滿洲國そのものとして見れば、それ故に純然たる農業國として見るべきである。

そこで純然たる農業時代にその社會があるか、繰返して述べ來つたが如く、その政治に於いて滿洲國は、封建時代に適應するものでなければならぬ。成程、昔時の封建社會はその本質的特徴として一方には、土地が數多の獨立領地、諸侯領地及び特權地主の所有地とに分離してゐたし、又他方には、之等の領地を、契約的家臣關係に依つて統合してゐた事である。そしてこの場合には、封建地主と農民とが、因襲慣例、傳統の愛好、權威に對する屈從、舊思想等に囚れて、

支出額		
軍費	98,554,951	68.3%
財政費	18,867,717	13.1%
文政費	26,804,137	18.6%
合計	144,228,805	100%
収入額		
直接税(主として地稅)	8,333,761	6.8%
間接税	87,318,357	(37.7%)
内(鹽稅)	(45,884,301)	(8.0%)
内(菸酒稅)	(9,761,491)	4.8%
臨時稅	5,887,007	

全ての新しいものに對する嫌忌の情を、その共通の心理的特性とし、等級觀念を強大とならしめて來る。マルクスの言を借りて云へば、「吾々はこの場合に獨立人を見ない。何人もが相互に依存してゐるのを見出す、—農奴と地主、家來と領主、俗人と僧侶がこれである」と。そしてこの依存關係は社會を不動になし、沈滞せしめると同時に、やがてはその特權階級をして、その租稅及び公課を限りなく多様とならしめ、それに対する農民の反亂及び一揆を誘發せしめて來る。従つて封建制度は弊害の擧げらるべき多くのものを具有してゐることとは、確である。然しその弊害たるや、社會がその經濟關係に於いて、農業時代より進んで商業時代に入込んで來たにも拘らず、その上層建築として硬化し、容易にその基礎建築に適應し得ざる場合に發生するものであつて、その當初より甚しき弊害をば續出せしむるものではない。

然らば吾々はその封建制度によつて、何を結果せんとするか？

曰く、それは第一に治安の維持であり、第二には財政の安定である。既に吾々が第一篇に於いて詳論し置きたるが如く、滿洲國の治安と財政とは、單に滿洲國の興亡に關するのみではなく、實に吾が日本の興廢に關與する重大性を有してゐる。考へるに滿洲國の地積の廣大と交通の不發達と戶籍の悉無と高粱の繁茂と年來の惡政とは、滿蒙の天地を長年月に亘つて、馬賊の跳躍に委してゐた。今、俄にその匪賊を一掃し去るととは、有力なる日滿兩軍の協力を以つてするも、決して容易の事業ではない。のみならず、この匪賊性をば民衆より排除することは更に又一層容易の業ではない。

利のあらざるを見て、しばし平靜を裝ふてゐる支那も、再び時の至ることあれば猛然として、大刀會及び紅槍會の如き匪賊を招撫し或は使喚し、反日義勇軍及び抗日救國軍を滿洲國內に侵入せしめ、更に組織あり訓練ある便衣隊を以つて、滿洲國內に治安を攪亂するや、日を睹るよりも明白である。

而もその日たるや決して遠くはあるまい。一九三六年は、彼のロンドン條約の效力を解消する年であり、即ち米國海軍力が日本海軍力を、その比率に於いて壓倒する年であるばかりでなく、一八九六年の東清鐵道條約によつて、支那がそれまでに滿洲國を承認しないならば、代償を支拂つて何時にても東清鐵道即ち南滿鐵道を、回収し得る年ではないか？ —そこにロシアがその東支鐵道を賣り急ぐ理由がないでもあるまい。—兎に角その日が來た時に、支那、否、その背後の隱然たる野心國によつて、再び滿洲國の治安が攪亂され來るに違ひない。そしてそこに最も活躍せしめられるものは、彼の劣卑なる便衣隊戰術であらう。

この便衣隊戰術は嘗つて、一八〇八年ナポレオン軍の侵入に對して、西班牙の用ゐし戰術であり、如何にそれによつて大ナポレオン軍が困却し、東奔西走、徒らに疲勞困憊せしめられたかは、史家の吾々に警告する所である。

そしてこの便衣隊に對する作戰は、正規の集團部隊を以つて奔命に疲れることなくつて、先づその地方その地方の一つ地區の治安をば維持することによつて、便衣隊の侵入を未前に防遏することを、最善の方策としなければならぬ。匪賊に對しても亦然りである。

便衣隊或は匪賊の作戰は、正規の集團部隊に對して逸にして勞を俟ち、徒らに東奔西走、戰費をば空費せしむることを狙つてゐる。然るに封建制による地方治安の維持策は、その便衣隊或は匪賊に對して、更に逸にして勞を俟つ方策である、と云はねばならない。見よ！東三省の舊軍閥政治に於いて、その國家經費の約七割弱が軍事費を占めてゐたことによつても、また滿洲國の軍事費が、日本關東軍の絶大なる協力を以つてして、尙三千三百萬圓を計上してゐることによつても、一若しそこに吾が關東軍の經費を算入するならば、それは又甚しき巨額に昇るであらうが、一それは畢竟何を意味してゐるか？

説明するまでもなく、滿蒙治安の維持が、如何に匪賊によつて、常に脅威されるかを、如實に語るものに外ならない。然し問題は單にそれのみではない。果して日本及び滿洲國は、今後長くその巨費に堪へ得るであらうか？ よし堪へ得るとしても、それは大なる國家財政の赤字とならねばなるまい。では國家財政を見よう。舊軍閥時代に於いては、その財源の大部分、殆ど九割までを占むるものは間接税、就中消費税であり、殊に鹽税の四割と菸酒税の一割とである。又新政權の確立したる現代に於いては、一舊軍

滿洲國の租稅收入	
稅目	大同元年度豫算 (單位千円)
關稅	四〇、四六〇
鹽稅 (專賣益金除外)	一六、八一四
統稅	七、一七二
出產稅	六、二一三
營業稅	三、六九四
田賦 (地租)	二、九五五
菸酒稅	二、〇六九
印花稅	一、九五五
契稅	一、四四五
牧畜稅	九六〇

閥時代には本國政府に全部送金してゐた、一關稅收入を筆頭として、尙地租の五十五割に當つてゐるも、鹽稅はその專賣益金を除外して、尙地租の五十五割に當つてゐる

ではないか？ 而も消費税は決して良税ではない。特にその鹽税たるや、惡税目としての定評をば有してゐる。加之、間接税は決して確乎たる財源ではない。如かず、直接税、殊に農業國に於いては、——ヘンリー・ジョージの單稅論によらずとも、——地租に國家財政の基礎を置かねばならない。

故に先づ地檢を行ふことである。例へば明治新政は地檢により、従つてその地租收入によつて、財政の基礎を確立し、以つてその政權を安固たらしめ得たが如く、一時も早く滿洲國は、その地積とその所有權との調査を斷行すべきである。又この地檢は、當然戶籍の確立を條件としなければならぬ。實に滿洲國の社會的不安は、一つにその戶籍の悉無にある、と放言するも敢て過言ではあるまい。だから滿洲國當局は、急速に其戶籍を確立し、且つ指紋による、或は更に進んでは指紋及び寫眞によるカルテ・デア・イデンテ(同一本人の證明書)を各人に、日常所持せしめるの制度を採用しなければならぬ、と考へ

る。

滿洲國が農業を以つて立國せんとする以上、先づ土地を重視しなければならぬ。そして國民をしてその土地に定着安住せしめなければならぬ。然り、國民が定着安住するか？ では彼等相互の間に、自ら各種の社會關係、就中、血縁關係が発生して、次第に錯雜化して、社會の連帶性を助長し、その社會治安の維持に、共同責任をば痛感し來るであらう。然らばこの不安時、殊に交通不便の奥地邊境にあつて、能く定着安住して、國家の基礎形體をなさしむるの良策は、封建制度の特性を利用するの外なきを、卓識者は肯定するに吝であつてはならない。

洵に舊軍閥時代の滿蒙は、中世の日本に於ける群雄割據、戰國亂闘の時代の社會的發展階段にあつたものに外ならない。そしてその亂闘の後を受けたる徳川幕府が、三百年の封建政治をしき來つたが如く、滿洲國は又この封建政治の特性を、大に顧慮採用することなし

には、徒らにその勞を空費して、容易にその治安維持を策し得まい。のみならず、この滿洲國の不安は、即日本の不安であり、又東洋の不安であり、世界の不安である。

「でも三百年の封建政治を!」と、必ず悲鳴をあげ來る反對論者があらう。こゝに私は再びこの反對論者の爲に、前述したるマルクスの説を、再記するの煩を忌避しないことにする。

マルクスは、「……その社會は、自然にその發展階段を飛躍し得るものではないし、また排去することも出來ない。たゞ社會は、その新しき生みの悩みを短かくするか、緩和することが出来るだけである」と説いてゐる。私も生みの悩みを短縮するか、又は緩和するか、――より進める社會階段にある國家によつて、援助協力される場合に於いては、――可能であると信ずる。否、短縮すると同時に緩和することも可能なり、と考へる。

斯くして吾々は滿蒙に於いて、第一回三ヶ年封建計劃に次いで、第

二回及び第三回の合計九ヶ年間に少くとも十ヶ年間を出ずして、その所期の治安を、社會の根柢から確立しなければならぬと思ふ。

そうだ、先づ第一回三ヶ年封建計劃の實施である。ぢやその第一回計劃の終了する年は、一九三六年ではないか? 世界の實勢がコペルニツクス式に、一大轉回を試みるであらう年ではないか?

第一回封建計劃

然らば、第一回封建計劃は如何にして實施さるべきであるか?

私は、この問題に解答をなさんが爲に、暫く日本の人口問題、從つて移民問題を概観しなければならぬ。

日本現在の社會苦即ち總ての社會問題は、實に人口問題をその母體としてゐる。それ故に日本社會は、この人口問題をその根柢より解決することなしには、その他のどの社會問題をも、眞に解決することは甚しく至難である。

今、昭和五年度に行はれたる日本の國勢調査を見るか？ 内地の總人口は六千四百五十萬であり、大正十四年より四百七十萬人の増加を示して來た。それ故に一ヶ年平均驚くべし九十四萬の増加數を現してゐるのである。勿論、この外に朝鮮の二千百萬、臺灣及び樺太、その他の五百萬を算入するならば、遂に日本はその人口に於いて、九千萬を突破するに至つたのであつた。

これを日本内地に於いてのみ考へるならば、明治初年に於いては、僅に三千二百萬内外の人口を有してゐたのであるから、六十三年間に約倍加した計算となるであらう。世界の人口一ヶ年平均の増加率は千人について十一人五分九厘であり、その増加率を以つてするならば、人口は六十年と三十六日を以つて二倍となる譯であるから、日本の今日までの人口増加率は稍々世界の平均人口増加率を以つて、進み來つたものと考へられる。然るに最近五ヶ年間の自然増加率は、千人につき十四人の割合となつてゐるから、かゝる趨勢を以つ

て増加し行く時には、今日よりもより甚しき人口過殖の社會問題に逢着せねばならなくなる。

現在に於いても日本内地の人口密度は、一平方糎一六九人であり、白耳義の二四五人、和蘭の二一一人、英吉利の一八六人に次いで、世界第四位に當つてゐる。けれども若し吾々が其人口をば、全面積と比較しないで、その平地と比較するならば、日本の平地は僅に三割五分であるのに、白耳義及び和蘭は九割八分までの平地國であり、英國のそれは七割七分二厘であり、佛國は六割九分三厘、獨逸は六割六分、あの半島國の伊太利に於いてさへも四割六分の平地をば、見出し得るのであるから、この點に於いて、日本は世界第一の人口稠密國であり、又如何に日本は他の列強に比して、プロレタリア國家であるかを、充分に認識して置かねばならない。

再び私は言ふ、そこに現代日本社會のあらゆる苦惱と煩悶とがある。そして一部の論者は、その對策として新マルサス主義を提唱

し、産兒制限を説く。けれどもその反對論者は、この民族的自殺賛成論をば排して「見よ！ 現代佛蘭西の悩みを！」と云ふ。然り、一度産兒制限の知識が一般化するか、その時は滔々として防止すべからざる人口減衰が、必至の情勢となるからである。そして哲學者の或る者は、自己の體驗に立脚して「生めよ！ 何とかなるものである」と説き、或る社會學者は、英雄論から出發して「英雄は非打算的である。日本民族は英雄的民族である。だから日本民族は打算を超越して生きねばならない。然るに産兒制限は一種の打算である。故に日本民族は産兒制限をやつてはならない」と論じ「生め！ 殖せ！ 何とかならう」と、二つの獨斷に立脚した三段論法で、この大問題を片付けて了ふ心算である。

却説、これ等の無打算的なる樂天論を別として、そこに移民論が立てられる。或る代議士は「何、どしどしブラジルに送つて了ふまでだ」と云ふ。でも、如何にブラジル政府が日本移民に好意を有してゐた

にせよ、一ヶ年百萬の日本移民が、鯨波の如く押寄せて往つたなら、畢竟それは排日と呼ぶ原因とならざるを得まい。そして又それは、アフリカ南端をめぐつて三ヶ月を要する航海と、それに要する船舶とを考慮に入れざる空論である。敬愛する代議士諸君よ！ 本當に君等は空論で結構である。實行にとりかゝらぬ中に、素敵！ 必ず君等の所謂我黨内閣は瓦解するであらうから。現に又君等は誰も我黨内閣と呼び得るものを持つてゐないから、その空論は確に祝福されてもよい。

そこで人々は、勢滿蒙及び西比利亞に着眼せねばならなくなる。斯くして「滿蒙へ！」と叫ばれ、西比利亞へ！」と叫ばれ出して來た。明に、赤裸々に私は言ふ。今次の滿洲事變は、この日本の大國策、即ち公正なる條約によつて、この人口問題に解決の光明をば投與せんとする、日本民族の血によりて描き來つた宿年の渴望を、不信なる支那軍閥、野心ある第三國によつて、不正に蹂躪され、葬去られんとしたか

らに起因した。では又滿洲事變は、吾々に公正なる日本國策の遂行を約するものでなければならぬ。

故に滿洲國は農地開拓の爲にする特殊機關を設置し、農業移民をして十五箇年間に五百萬町歩の開発を行ふ計劃を立てた。そしてその開發の大部分をば、日本内地の移民に期待しようとするのである。日本政府もまたその移民によつて、大陸發展の基礎を構築し、併せて逼迫せる吾が國の人口問題の解決を策し、進んで國防上の要求を充足し、以つて日滿關係を緊密且つ永久ならしめんとする方針をばとり、基礎移民として昭和七年度以降十二箇年を期して、政府補助の下に内地人の農業移民十萬戸——一戸五人平均として五十萬人——を移植することに決し、昨年九月一回自衛移民として東北諸縣より約五百名の在郷軍人を募集訓練し、十月三日東京を出發同十四日松花江下流佳木斯に到着し、そこで諸種の準備訓練をなした後、本年二月下旬その移住地たる佳木斯の南方十三里半の永豐鎮に移らしめ

たのであつた。又吾が拓務省は、第一回自衛移民と大體同一の方法を以つて、約五百名の第二次自衛移民團を募集組織し、相當の教養を與へた上、佳木斯附近に派遣すべく、その豫算として三十八萬二千圓をば、既に議會の協賛を得たのであつた。

では移民一人の政府補助額は、七百六十四圓となる。而も十二箇年に五十萬人の移民を送るとすれば、それは日本内地の自然増加數の僅に二十分の一にさへ當つてゐない。——私は想起する、獨逸がその人口過殖に苦しむや、彼カイザーは、世界に冠絶する三萬五千噸級の巨船五隻を新造して、五日間を以つて大西洋を横斷し、一ヶ年七十五萬の移民をば、米國に送込んだことがあつた、と云ふことを。そしてまた私は、拓相永井柳太郎氏が、植民政策の專攻學者として、嘗つて大學教授であられた、と云ふことを。——然しそれでも一ヶ年の平均割當移住者數は、四萬一千六百六十六人となり、その政府補助費の一人割當額は、年を追ふて多少減額されるであらうが、若し一人七百六

十四圓を附與するとするならば、三千百八十三萬二千八百二十四圓を要し、五十萬人の移民に對するその補助費は、三億八千二百萬圓を必要とする計算となる。それは赤字の日本にとつては、確に巨額である、然しそれによつて、日本國策の礎石が据えられるとすれば、十二箇年間で決してそれは巨費ではない。

殊に當局者の説明によれば、この自衛移民團は、農耕を主とするものである事は言ふまでもないが、國防上の必要もまた充分考慮しなければならぬ。而もその土地を購入するには個人所有してゐる餘り高價なものは、經費の點で到底手に入れる事が出来ない。所が佳木斯附近は匪賊の所有してゐた土地で、手に入れるのが容易であつたのと、この地方は腐蝕壤土で、その上夏期は高温、無霜日數が二百日もあるから、作物も十分成育するのみならず、ロシヤ赤衛軍の大規模なるシベリヤ武装移民團——即ち屯田兵團——に對し、ハバロフスクより松花江を溯行して、哈爾濱に到る要路に當り、國防上から見て

も非常に重要な地點であるそうである。

そして第一回の移民は、今年の春からその地方の開墾を始め、大麥、小麥、馬鈴薯、高粱、粟等を栽培してゐる。それから移民の家族問題であるが、募集の條件が二三年は妻子を呼び寄せないと言ふ事になつてゐるので、五百名のうち妻子をもつてゐる者は、僅に六、七十名で、他は二十四、五歳のものが多數であつた。「然し何時までも男ばかりではやつて行けないから、次の議會では妻子を呼び寄せる爲の費用、獨身者には花嫁を世話する經費をもとりたいと思つてゐる」と當局は語つてゐる。又第二回募集は、應募人員の二倍乃至五倍の中から選抜した者を、六月五日から一ヶ月間群馬縣の相原陸軍演習場で教育し、七月十日頃滿洲に向けて出發する豫定であるそうである。

けれども一ヶ年五百名の移民數を以つてしては、十二箇年間に僅に六千人に達し得るのみではないか？　だから最初の一、二年は試験時代であらう。そしてその試験時が経過した時には、大舉年に五、六

萬の移民群が送られることとなるであらう。それ故に私は、十萬戸移民計劃をこゝで、政治家の空論なりとは、思考したくない。

然し私がこゝに閉却し得ないことは、生活程度の問題である。日本内地人、朝鮮人及び舊山東の苦力の間には、それ〴〵生活程度に大なる差等が介在せしめられてゐる。原則として移民は生活程度の低い社會から高い社會に入込むのでなければ、その成功は保障し得ない。日本の移民が米國に於いて成功し、朝鮮の労働者の日本内地に移動し來つて、日本内地の労働者をば、その職場から驅逐壓迫し得るのも、要するに、その生活程度が、その社會よりもより低いが爲に外ならない。

然るに日本人の滿蒙移住は、この原則を無視してゐる。一日二錢にて生活し得るといふ土着の農民、又は山東河北より安住の地を求めて流入して來る支那の苦力に對しては、近時貧窮の甚しきものがあるとしても、日本内地の農民は到底その敵ではない。滿洲國の人

口は、從來の東三省に熱河省の人口約四百五十萬を加へて、三千五百萬と稱されてゐる。そしてそれを、今、民族別に分解するならば、滿洲人三百萬、朝鮮人百萬、日本人二十二萬、ロシア人十萬であつて、殘餘の二千八百萬は漢民族であり、而もこの中の半數一千數百萬は、明治四十年以後の二十餘年間に増加し來つた者である。殊に昭和二年以來年々その移住數は百萬を超え、そしてその多くは北滿の未開拓地を、日本の移民計劃と等しく、目指して分布してゐるではないか？

然らば論者はいふ、なに、資本を持つて行くさ」と。けれどもまた吾々の忘却してはならぬことは、日本は七分一厘の高利公債を借りてゐる國だと云ふことゝ。冬期その固定資本は活用し得ないから、そこに利廻りの低率を餘儀なくせしめられねばならぬと云ふことゝを。でも、若しそれが國防上の必要に坐するものならば、日本は飽迄もその經濟的犠牲を忍ばねばなるまい。近時、關東軍の意向によつて、向ふ五ヶ年間に三萬人の工業移民を滿洲國に送り、基礎工業の開

發に資せしむることが議されてゐる。「そして滿洲國に於いて鐵道全線の委任經營をはじめ、清津羅津等の港灣修築はもとより、石炭、石油等に對する新興事業、硫安會社、昭和製鋼所等の新設、その他基礎産業に要する工業移民の必要は、漸次多きを加へて來てゐる。これ等の事業は滿蒙開發の使命から云ふも、國家的事業であつて、單なる營利會社の如く安賃銀の故を以つて、支那人を使用するが如きは、その使命に反するのみならず、内地の人口過剩を救ふ所以でもない。この意味に於いて大連汽船の乗組員問題の如きも、邦人船員の使用を希望する」と意向されてゐる。

成程、近時の國防は、その銃後にある工業力に依繫する絶大なるものがあるからである。

又吾々がこゝに明確に認識せねばならぬことは、そこに「國防的移民」と「經濟的移民」とがあると云ふことである。そして多くの場合、この兩者は兩立し得ないと云ふことである。けれども出來得べくん

ば、財政的に窮乏してゐる吾が日本としては、兩者を兩立せしめねばなるまい。そうだ、そこにもまた私は、封建制の存立理由を發見することが出来る。

國防移民と經濟移民の矛盾とその調和策

國防的移民政策を考へるか？ それは多く犠牲的である。そして犠牲的移民を考へるか？ 私は伊太利に於ける僧侶の内地移民をば、思ひ出さねばならない。

佛蘭西から伊太利へ越す國境に、東海道の戸塚のトンネル程のトンネルがある。それを通り越して、多くの人々が驚くことが三つある。その一つは自然、殊に地相の變化であり、その二は、政治の變化である。佛蘭西の自由主義に比して、伊太利の彈壓ぶりである。そしてその三は、佛蘭西側に比して、伊太利側の村が非常に少規模であり、多くは十五六軒の村であつて、それがあちらの谷こちらの谷間に點

々としてあるのみならず、その村の中央に必ず教會があるといふことである。私は、流石に羅馬法王の國だけある、宗教は盛んなものだと感じたのであつた。然しそこには確に認識の不足があつた。何故ならば私は十五六軒の村が、其一つの教會を經濟的に支持してゐると考へたからである。所が事實は却つて反對で、その教會即ち僧院が十五六軒の村を、經濟的に又信仰的に支持して行くのであつた。今、日本の寺院と町村との地位關係を見ると、日本の寺院は多く町端れ、村端れにあるのに、伊太利の寺院は、多く其町の中央、村の中央にある。そしてそれは明にその發生過程の前後を立證するものであり、従つて日本の寺院が經濟的にその町村に寄食するものであり、反對に伊太利の町村は、その教會或は僧院より後に寄生的に發生したと云ふことを語るものである。不毛の高原、人跡まれなる山谷に修道院が建てられる。彼等はそこで懺悔の生活を送り、神を見る修業を行ふのである。だから彼等は如何なる艱難もまた辭すべきでは

ない。斯くして荒野は修道院僧によつて開墾される。彼等は元より打算を超越し、犠牲的であるからである。

私の見たもの、中には全山岩である。その岩の裂け目に雜草がひよろ／＼と生えてゐるばかりであるのに、その岩山に廣さ五六十坪、深さ三四間の穴が、所々五、六百も掘られて行く、そしてその底に雜草の枯葉が吹き溜められて、腐土となるのを待つて畑が作られる。その努力は神である、否、神でさへも辟易する。だからその難業苦行をやり通す彼等に、神を見ることが出来ない理由はない。私は感激の涙を以つてそれを見た。畑が出來ると、山羊や羊が飼はれ、牛が飼はれる。織物が織られ、バターが賣られる。それにつれて一軒二軒と、次第に村がその僧院を中心として出來るのであつた。そして私はその時、宗教家に二種ある。自ら神を見んとする宗教家と、他人をして神を見せしめんとする宗教家とがある。而も日本に於けるそれは、殆ど後者に屬する者であること、よし彼等自身は神に對して盲

目であつても……と考へさせられた。

近時俄に吾が宗教界に於いて高調され來つたものは、滿洲國に對する布教である。だが送られんとする僧侶は、その何れであるか？吾々は、その第一歩に於いて誤つてはならない。日本に於いて過剰し不用となつてゐる種類の僧侶は、又滿蒙の野に於いても、その發展の吸血兒であり、明に有害無益であるからである。

現在は非常時である。この非常時意識の濃厚である間、日本人は能く犠牲的であり得る。君國の爲に自己を犠牲にし、團結協力して如何なる苦闘も繼續する。匪賊重圍の孤村にあり、彈丸飛雨の中にあつても、遙か東方二千軒の紅天を仰げば、莞爾、たゞ命に安んじて麥を刈り、高粱を蒔くことが出来る。私はそれを、自らの心臓に躍動する日本民族の血に叫びかけて、誓ふことが出来る。

然しながら、國防的移民より一轉して經濟的移民となるか、そこに利損の打算が起らざるを得ない。識者の或る者は、日本の農村移民

よ！滿蒙に於いては苦力と等しき生活程度に轉落せよ。一日二錢にて暮せ！然らばその移民の成功は疑を入れない、と主張する。だが、より善き生活條件を求めて、人類は移動すると云ふ社會的原則を無視したる主張で、それはあらねばならぬ。

而も彼等が悲慘なる生活を追ふてゐるのに、他方等しく日本人である官吏及び滿鐵社員の生活が——彼等移民のそれに比して——餘りに特權づけられ、餘りに富裕であるならば、人情は必ずその高き生活標準に向つて努力せしめずにはゐない。この點に於いて自衛移民が、不良有閑遊惰なる日本人の多き南滿の地を擇ばずして、北滿の地を選擇したと云ふことは、その地を得たものと考へねばならない。然し前述の如く、新來の苦力移民は、治安の維持せられてゐる南滿一帯が、既に先住者によつて占有せられ、最早割込み定住するの餘地なきに至つたことから、又等しく北滿の未開拓地に進入して益々來るとすれば、殊に現在住民の多くは、治安の不安に脅威されて、大舉遊牧

群の如く、關東軍の移動の後を追ふて移動し居るの實狀より推理するも、日本内地の自衛農村移民團が定住し、その治安を維持するや、即ち基礎移民團を要所々に配置して、その間の治安を保障し、そこに内地より非武装移民の巨群を移住せしめんとする企圖が、日本當局によつて實施されるに先んじて、必ず水の低きにつき、蟻の蜜に這ひ寄るが如く、新來の、最もその生活程度に於いて低き、山東河北の苦力移民團によつて、蝟集されて來ると云ふことは、太陽を指すが如く、今日より指し置くことが出来る。

そしてその場合となるか、生活程度の高き内地人農民は低き山東農民によつて、壓倒驅逐されねばならない。壓倒驅逐されるか？ その地區の治安は再び不安に陥らねばならない。では日本の拓務省は、この新來する山東河北の農民保護の爲に、日本の自衛移民團に、財政的補助を永遠に支給するの餘裕を有してゐるか？ それは大なる疑問である。

然らばこう云ふことだけは明である。國防的自衛移民は一時的である。そしてそれが經濟的移民となり來るか、そこに生活程度によるグレシヤムの法則が行はれる。故に又日本の内地人移民は、必然没落せねばならぬ運命線にある、と云ふことは明である。

一體、自衛移民群の社會的生活形態は、未開の遊牧民群が、農耕民群に變性しかけてゐる場合の、社會發展階段に適應した形態である、と考へられる。スペンサーは、遊牧民群の特性を述べて、「それは經濟的には牧畜者であり、政治的には征服者であり、歴史的には争闘者である。そして止つては國民となり、動いては軍隊となるものである」と云つてゐる。彼のロシアのカタリナ女帝時代に、カルマツク族の名によつて知られてゐる、即ちコザツク族の武装移民團によつて、疾風野を渡るが如く、シベリヤが侵略され來つた史實によつても、この自衛移民團が如何に未開地侵略に對して、能率的社會形態であるかを、吾々は知ることは出来よう。

そしてこの自衛移民團が農耕地區に定住すると云ふことは、その民群の中に遠からず分業と分化とが行はれ、そこに武備を專業とする武門武士を發生せしめて、封建制度に入込み來る社會發展過程の常徑的礎石をなすものである、と考へることが出来る。

冷靜に、植物學者が大森林の中にあつて、一枚の葉と他の葉とを比較する時の様な、無私の心を以つて、現實を直視する必要がある。すると、そこだ。國防的内地人移民團と經濟的支那人移民團との間に作用する、グレシヤムの法則を忌避しようとするならば、その能とする所によつて、日支人移民團の間に分業を行はしむることである。日本人をしてその身を以つて、又その組織力を以つて、その治安維持に當らしむることである。だから又日本移民には土地を分與しなければならぬ。そして日本人は、その土地を新來の支那移民に小作せしめ、向ふ十箇年間を期して、その土地をその小作人に讓渡するの計劃を進めしめねばならない。而もその間に、日・鮮滿蒙支人の間に

介在する、生活程度の差異を排除して、作用し來るグレシヤムの法則を忌避排撃せんが爲に、新來の移民團の間に於ける文化程度を、高き日本人移民團の程度にまで引上げねばならない。

恰も英國がその領土印度に於いて、日本の商品と相競争せねばならぬ地位に立つを以つて、國際勞働局を設置する運動に巨費を投じ、國際勞働會議を通して日本の勞働運動に間接呼びかけ、日本の勞働賃銀を引あげることによつて、このグレシヤムの法則から脱却せんことを狙つたのと、それは同理であらう。而も生活程度の上昇は、その民族の幸福に違ひない。そして日本移民は單なる地主ではない。その一命をば何時にても犠牲として、その小作人、否、その新來の移民團の生命と財産との安全を確保する者である。實際、現在の社會不安を以つてしては、移民の生命と財産との安固を期することは絶望である。では又この封建制度に入込み、以つて生命と財産との安固を保障し得るならば、それは一大幸福の確立であり、一大社會進歩で

なければならぬ。



— 盟 聯 先 づ 傘 を と れ —

満蒙の野を
見るか、そこに
は満蒙漢鮮の
各民族が混住
してゐる。然
しそれ等は、國
家的秩序の建
設に對しては、
砂であり、礫で
あり、石であり
瓦であるに過
ぎない。そしてそこに永年要望されてゐたものは、實にその結合劑
たるセメントではなかつたか？ 今、日本内地人の移民團は少數で

はあるが、然し強力なるセメントとして投入されて來た。
卓識者よ！ 必ずその封建制度の特性と、それが社會の進展に對
して演ずる役割の排斥性を、確認するに吝であつてはならない。
そうだ。確認して、そしてそれを即時實行に移すに吝であつてはな
らない。

一九三六年は、二年半後、即ち百三十週問後に迫つてゐる。
數學者ポアンカレは云ふ「見よ！ 見よ！」と。そして「見よ！」と。砲彈の雨
に傘して、平和を説く聯盟の認識不足を笑ふならば、吾々は傘を取つ
て砲彈を見ると共に、世界の平和の渴望に喘ぐ様も熟視しなければ
ならない。然り、滿洲國の理想を見ると共に、その現實の發展階段を
も、自己の歪めるイデオロギーによつて斜視してはならない。正し
くその眞の姿と勢とを見なければならぬ。
最後に私は云ふ「日本人よ！ お前は滿蒙を見よ！ そして米國
を見よ！」と。 — (完) —

昭和八年六月廿八日印刷
昭和八年七月三日發行

〔定價金壹円〕



論建封蒙滿

著者	赤神良護
發行者	田中清之
印刷者	山村孝三

東京市小石川區關口水道町四一

發行所

東京市目黒區中目黒三ノ五二

神華社

電話 信翰 三〇四五番
振替東京六七五二二番

大坂次

東京市日本橋區柳原文盛堂

大坂市北久太郎町

柳原書店

名古屋市長者町川瀬書店

〔本製所本製田山〕

現代經濟恐慌と資本主義の將來	テクノクラシーへの挑戦	滿蒙封建論	西洋思想の日本化	國家社會主義原理	國家社會主義論策	日本人の偉さの研究	日本精神の闡明	日本精神に関する一考察	我等の國史
岩田百合治譯 (英國)ホブソン著	早稻田大學講師 中島正信編著	赤神良讓著	早大圖書館長 林癸未夫著	早稻田大學教授 林癸未夫著	經濟學博士 林癸未夫著	中山忠直著	池岡直孝著	文學博士 紀平正美著	文學博士 中村孝也著
美新裝菊本判	美新裝菊本判	美新裝菊本判	本文六判上製 三六〇頁	本文三三〇頁 三三〇頁	美新裝菊本判	本文四六判並製 三三〇頁	美新裝菊本判	美菊裝大本判	菊判上製 三色版口繪入
定價、 送料、 〇八〇	定價、 送料、 〇七〇	定價、 送料、 〇〇八	定價、 送料、 一八〇	定價、 送料、 一三〇	定價、 送料、 〇〇八	定價、 送料、 〇〇八	定價、 送料、 〇二八	定價、 送料、 〇六〇	定價、 送料、 一五〇

番二二五七六京東替振
番五四〇三輪高話電

社華章

黒目中區黒目市京東
地番二八五目丁二

GANNANDO SHOTEN
KANDA TOKYO
店書堂南巖

OL
NO. 21040

